

校区のあゆみ

# 花田

豊橋校区史

43

*Hanada*



Fujio.T







豊橋市制施行100周年記念

# 校区のあゆみ 花田



- 1 市民館まつり（作品展）
- 2 防災訓練
- 3 春・花田小と牟呂用水

- 4 冬・花田小と牟呂用水
- 5 羽田上神社
- 6 花いっぱい運動

- 7 8 校区体育大会
- 9 一番町のしだれ柳
- 10 市民館まつり（寸劇「金色夜叉」）

花 田 の

# 点描

The sketch of Hanada



5



1



6



2



3



4



7

1 花田交番

2 百度屋敷跡

3 城海津跨線橋

4 北側町の石仏

5 花田小学校

6 花田小屋上より観た花田校区

7 新緑の柳と牟呂用水



8 羽田中学校

9 羽田上公園の花壇

10 朝市

11 ゲートボールの風景

12 戦前に造られた製糸工場跡

13 花田公園

14 羽田祭り

花 田 の

# 文化

The Culture of Hanada



1



2



3



5



6



4



7



8



9

- 1 羽田八幡宮
- 2 涅紫図 (宝永元年)
- 3 吉田藩お抱え絵師 稲田文笠の菅原道真像
- 4 教育勅語 (明治23年)
- 5 浄慈院の御堂 (享保年間創立の地藏堂・文化年間創立の護摩堂)
- 6 羽田文庫神門 (嘉永元年)
- 7 懸仏 (永享7年)
- 8 花田小学校にある誦智の碑
- 9 江戸末期、寺子の書いた習字 (嘉永年間から明治5年まで。作品を見ると、江戸時代でも羽田野・田中・大山・山本・近藤などの名字と名前が書かれている)

# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄



平成18年度  
花田校区総代会長

佐 藤 庄 一

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思えます。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

豊橋市制施行100周年という記念すべき年に、各町内の総会のみなさまを始め、校区在住の関係者各位、並びに学校関係者各位のご尽力により、『花田校区史』を発刊することになりました。発刊をお祝いするとともに、関係者のご努力に深く敬意を表す次第です。

さて、今回は、編集にあたって、校区の歴史や文化、生活の様子など、広い範囲にわたり、調査をお願いいたしました。

私たちの住んでいる花田校区（旧羽田村）は、長い歴史があり、多くの史料が存在しておりますが、今回の発刊にあたり特筆すべきことは、『花田校区年表』を細部にわたり調査し、作成できたことです。「年表」がしっかりできたことにより、校区史編集がスムーズに進みました。

心の通い合う地域社会の確立のため、この『花田校区史』が私たちの毎日の生活に生かされれば、幸いです。

最後に、この校区史の発刊にあたり、ご協力いただいた多くのみなさま方に改めてお礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

# 目次

# CONTENTS

第1章 自然と環境		3 地域に息づく人々の心	40
1 豊川の清き流れを北にして	7	(1) わが町・花田のところどころ (I)	40
(1) 東西に続く台地	7	(2) わが町・花田のところどころ (II)	43
(2) 花田の沖積低地と人々の暮らし	8	(3) 「庄八塚」の伝承	44
(3) 花田の景観と交通	9	第4章 わが町・花田の将来展望	45
2 悠々たる自然の営み	10	花田校区の年表	47
(1) 気候と自然災害	10	校区史関連の写真	51
(2) 街路や公園に見られる樹木と鳥類	11	編集後記	52
(3) 各町内の紹介	12	花田校区史編集委員	52
第2章 歴史と生活		参考文献	52
1 原始・古代の花田	15		
(1) 石塚貝塚 (縄文時代前期)	15		
(2) 牟呂王塚古墳 (古墳時代)	15		
(3) 古代文献に記載された幡太郷	17		
2 中世の花田	18		
(1) 百度屋敷の人々	18		
(2) 百度屋敷と今川17騎	19		
(3) 酒井忠次と石原百度兵衛・ 羽田村郷土都築伝四郎	19		
3 近世の花田	21		
(1) 栄泉の里 — 羽田村と吉田の町	21		
(2) 羽田村の生活とええじゃないか運動	22		
4 近代・現代の花田	24		
(1) 花田村の成立	24		
(2) 牟呂用水と花田の人々	25		
(3) 糸の町 — 花田	26		
(4) 豊橋空襲と花田・戦後復興と花田	28		
第3章 教育と文化			
1 教育のあけぼの	29		
(1) 寺子屋の教育	29		
(2) 寺院と神社の建立と現状	31		
(3) 羽田八幡宮文庫と羽田野敬雄	34		
2 新しい時代の教育	36		
(1) 保育園・小学校・中学校の設立	36		
(2) 市民館開館と活動の成果	38		
(3) 出会い・ふれ合い・学びの場 — 校区の四大大行事	39		



# 第1章 自然と環境

## 1 豊川の清き流れを北にして

### (1) 東西に続く台地

台地に位置する花田校区 花田小学校の北の方向にある百北ひゃくきたや越水こしみず方面へ行くと、下り坂になり、土地が低くなっていく。南の方へ行っても、緩い下り坂になり、田の中に盛り土をして建てられた中央図書館がある。このことから花田校区の大部分は台地の上に位置していることがわかる。

この台地は、花田から見ると、東西に細長く連なっている。東の方は、豊橋駅や市民病院跡地、市役所、中部中学校の方まで続き、8～10mほどの高さがある。また、西の方は、西羽田や牟呂方面へと続き、西の端は3mほどの高さになって、東から西へ少しずつ低くなっている。豊橋市の中心地は、ほぼこの台地の上に乗っている。牟呂用水も、この台地の上を、北東から西に流れている。この台地は、洪積台地の下位段丘面にあたる。

三面に分かれる洪積台地 豊橋市内の洪積台地は、三つの面がある。それぞれ高さによって、上位段丘面、中位段丘面、下位段丘面に分かれている。

上位段丘面は、60万年～12万年前、砂や小

石の堆積した砂礫層されきそうで、天伯原に代表される。

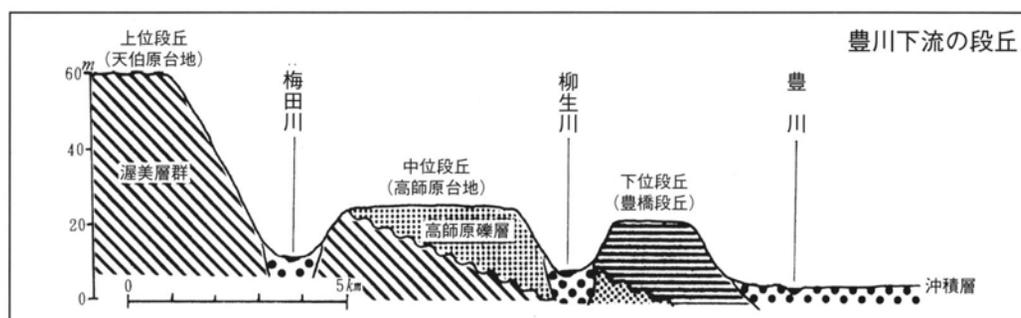
中位段丘面は、今から15万年～3万年前に堆積した礫層で、東田の坂上や向山、岩田、南栄、高師の町がある。

下位段丘面は、今から3万年前にできた砂礫層であり、豊川が運んできた土や砂、石でできた台地である。そこに私たちが住んでいる花田の町がある。

大昔の台地 花田校区の台地は、数万年前にできた。そのころはシイやタブ、ナラ、カシ、ツバキ、クスの木などの照葉樹が生い茂っていた。北や南には、流れの定まっていないう豊川や柳生川が流れ、海水も混じる入り海が控えていた。また、森には、木の実がなり、鳥や獣も住んでいた。北や南の入り海は遠浅で、海草や貝、カニや魚もたくさん獲れた。

大昔からこの台地には、人々が住んでいた。昭和57年(1982)に、牟呂の若宮あたりから、石を割って作った石器が出てきた。くわしく調べてみると、今からおよそ1万6千年前の旧石器時代後期のものだということがわかった。

花田町石塚も、こうした豊川の入りを海を見下ろす台地の縁にある。ここからは石塚貝塚という縄文時代前期の遺跡が見つかった。



【わが町 羽根井】より

## (2) 花田の沖積低地と人々の暮らし

豊川の低地で米作り 花田校区は、花田町中ノ坪・荒木・越水などの低い土地と花田一番町・二番町・三番町、羽田町、築地町、西羽田町などの一段と高い平らな土地とに分けられる。この低い土地を沖積低地、高い土地を洪積台地という。

沖積低地は、豊川の流れが作りあげた土地であり、よく肥えていたため、農業が発達していた。豊川は、流域面積が狭いわりに、水の流れが豊かである。何万年もの間に、何度も氾濫をくり返して、土や砂、小石をたくさん下流に運んだ。運ばれた土砂は少しずつたまり、川の中に島をつくったり、川の周りに堤防のようなものをつくったりした。冬の北西からの強い風や潮の流れなども土や砂を寄せてきた。

こうしてできた州やくぼ地には、ヨシやガマが生い茂り、ふだんは流れが入ってこなかった。大昔の人たちはこうした低地に手を加え、堤をつくった。ここは土地が肥えた低地で、水田をつくるのに適していた。

花田や牟呂の台地に広がる低地にも、米作りをして暮らしを営んでいた人たちがいたようだ。

**土地の様子と地名** 「花田」という地名は、ずっと昔、大化の改新以前、穂国と呼ばれていた時代から、「羽田」が波多や幡太、秦と呼ばれてきたことがもとになっている。

また、「羽田」は、入り海につきでた所（鼻、花、端）にある「田」という意味からその名がついたという伝えもある。「花井」（羽根井）、「花ヶ崎」の地名も同様である。

校区の北の低地には、「中ノ坪」や「荒木」という字名がある。これは、干拓地を意味する言葉であったり、新しく耕し起こした（新起）地名の言葉であったりする。時代はともかく、花田の北半分は、豊川の氾濫原や低地

をひらいていった土地である。

また、日本書紀には「波多湊」と書かれ、『和名抄』には、「幡太」という地名が載せられるほど、千年以上も昔から知られた歴史ある地であった。

**豊川の自然と花田** 北に豊川の流れをみる羽田は、向こう岸の小坂井あたりと行き来する船着場の一つだった。この渡しを「飽海渡」といい、後に「志香須賀（然菅）の渡し」というようになった。

豊川左岸の船着場は、飽海・関屋・城海津・石塚・羽田・坂津などがあり、はっきりしていない。豊川の流れの変化によって、時代とともにその名が変わったとも考えられる。ただ、古い書物には、羽田の御茶屋坂（今の八幡社西北の辺り）という場所に渡し舟があったと記されている。7世紀ごろには、「飽海渡」という記述が見られる。9世紀には、「人や物の行き来も増えたので、渡し舟を2そうから4そうにした。〈承和2年(835)〉」と、記録に残っている。この渡し舟は国が管理していた。そのころ、この辺りは、東西を結ぶ交通の要衝だった。しかし、豊川の流れの道すじの急変で危険になり、人々はもっと上流の方で渡るようになったといわれている。そして、いつしか志香須賀の名前だけが残された。

このように、太古の昔から、花田は、豊川の力強い自然とかがわって来たのである。



台地のひろがり（『花田の人と風土』より）

### (3) 花田の景観と交通

豊橋駅の西口から広がる花田校区 豊橋駅西口の駅前広場の北の町が花田一番町で、花田校区の東の端にあたる。この先、北西にかけて広がる町並みが花田校区である。ここに、約8,000人（男3,900人・女4,100人、3,000世帯、1世帯あたり2.7人）の人々が暮らしている。平成12年の国勢調査による人口密度は6,778人/km<sup>2</sup>、豊橋市全体の人口密度1,397人/km<sup>2</sup>（「平成12年豊橋の商工業」より）に比べても、かなり人口が集中している地域であることがわかる。



豊橋駅西口から望む花田の街

校区の景観 校区の東の方には、JRや名鉄線などの鉄道が南北に通っている。東三河の玄関口にあたる豊橋駅はバスやタクシーも発着するターミナルになっている。駅の西口には商店・飲食店・金融機関等が集まり、人や車の出入りも多い。近代的なビルの間には、昔ながらの庶民的な店も軒を並べ、駅東口とは違う、独特の雰囲気をかもし出している。いわば、古いものと新しいものが混在している地域である。

西の方は、牟呂用水沿いから牟呂八幡社にかけて一戸建ての商店や住宅が建ち並び、切

れ間なく牟呂町へと続いている

北の方の沖積低地には、国道23号線が東西に通っており、交通量が多い。国道に沿って飲食店・自動車関係の店が立ち並び、周辺もかつての水田から工場、住宅、高層や中層のマンション、アパートへと大きく変化を見せている。国道と洪積台地の北の端の間には工場と新しい住宅が集まっている。

校区の中央には、牟呂用水が東から西へと流れ、用水沿いには花田小学校やスーパーマーケット・商店・医院などが建ち並んでいる。南の方には、羽田中学校が位置し、県道豊橋港線まで住宅や商店が連なっている。

四方につながる道路・交通機関 豊橋駅には、JRの新幹線・東海道本線・飯田線、名古屋鉄道本線と豊橋鉄道渥美線が発着している。また、東口ペDESTリアンデッキの下には豊橋鉄道市内線の乗降場も設けられ、利用者の便をはかっている。

西口も、新幹線側ということで、多くの人々が利用するようになった。観光客のためのバスやタクシーの発着も多く、西部方面ばかりでなく、市外・市内各所へのターミナルの役割を果たしている。

道路網も整備され、国道23号線（蒲郡街道）と3本の県道（豊橋環状線・豊橋港線・大山豊橋停車場線）、さらに何本かの市道が四方に伸び、網の目のように繋がっている。

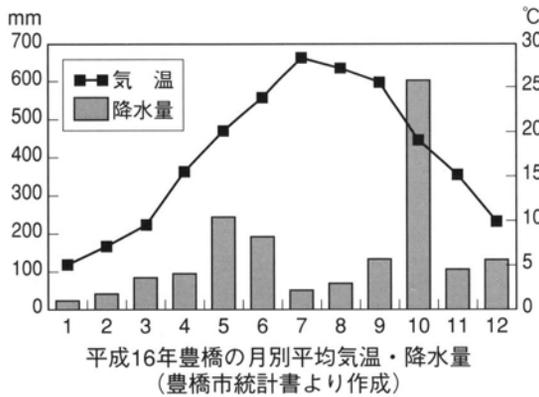


校区内の交通機関と主要道路

## 2 悠々たる自然の営み

### (1) 気候と自然災害

**気温と降水量** 豊橋市は、南方を太平洋の黒潮が流れ、東、北の二方を山脈に囲まれているため、気候条件に恵まれ温暖である。豊橋市の平成16年(2004)の年平均気温は17.2℃、最高気温は35.9℃、最低気温は-1.7℃である。平均湿度は70.3%、年間降水量は1,763.5mm、最大日量は177.0mm、年間降雨日数は108日で、1週間に2日の割合となる。



**風** 豊橋市の平均風速は3.3～3.4m/sで、年間を通しての最多風向は西北西である。豊橋地方の卓越風は北西の風で、秋から春先にかけてよく吹く。この山越えの乾いた季節風は“三河のからっ風”と呼ばれ、寒さで市民を震え上がらせている。夏は太平洋から湿った弱い南よりの風が吹き、むし暑く、不快指数が高くなる。

また、豊橋市は沿海部のため、昼は海風、夜は陸風、朝なぎ、夕なぎなど海岸地方特有の現象も見られる。

**風水害** 豊橋市防災対策課資料「過去の主な風水害」によると、明治31年(1898)6月から平成16年(2004)10月までの106年間に、豊橋市は43件の風水害を被っている。種類別では、台風・暴風雨が22件、大雨・集中豪雨が17件、竜巻が6件である。

<13号台風>

昭和28年(1953)9月25日。暴風雨と高潮による大災害。午後3時過ぎ平均風速20～30m/sec、時間雨量20～40mmが3～4時間続く。沿岸部で高潮による被害甚大(三河湾海岸部破堤)。豊橋では家屋の全半壊819戸、床上床下浸水4,077戸、堤防の決壊45か所。

<伊勢湾台風>

昭和34年(1959)9月26日。暴風雨と高潮による大災害。豊橋で死者8名、負傷者122名。家屋の全半壊2,124戸、家屋の流失1戸、床上浸水157戸、床下浸水288戸。大崎の潮位+350mm。

**地震** 和銅8年(715)から昭和55年(1980)までの1266年間に、三河地方に被害を及ぼした地震は56回、そのうち、豊橋に被害があった地震が28回もある。

単純計算をすれば45年余に1回ということになる。

<東南海地震>

昭和19年(1944)12月7日午後1時36分ごろ発生。震源地は熊野灘沖。規模はマグニチュード8.0。豊橋の震度は5～6。建物被害率1.0%。死者5名、負傷者38名。

<三河地震>

昭和20年(1945)1月13日午前3時38分ごろ発生。震源地は渥美湾。規模はマグニチュード7.1。豊橋の震度は5～6。建物被害率0.1%。死者1名、負傷者4名。

国は、「東海地震」が発生した場合に震度6弱以上となることが予想される地域などを「地震防災対策強化地域」に指定し、防災対策の強化を進めており、豊橋市も平成14年(2002)4月に地域指定されている。

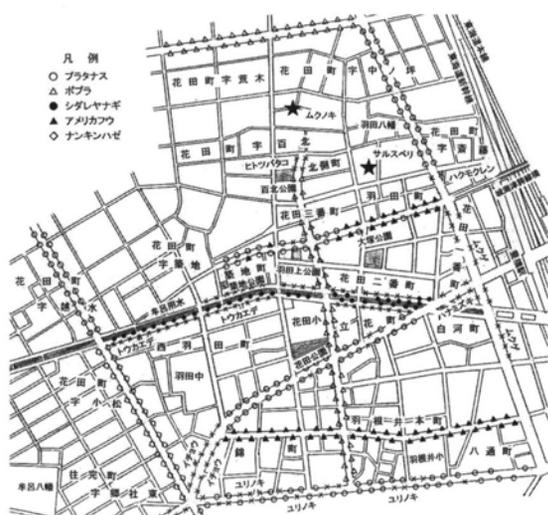
また、豊橋市は、東南海・南海地震によっても甚大な被害が生じるおそれがある地域として、平成15年(2003)12月に「東南海・南海地震防災対策推進地域」にも指定されている。

## (2) 街路や公園に見られる樹木と鳥類

昭和初期の花田には、民家以外にも多くの製糸工場が立ち並び、周辺には桑畑やみかん畑、雑木林など多くの緑が残っていた。しかし、昭和20年（1945）6月19日夜半からの空襲で焼け野原となり、緑が残るのは花田小学校校庭の森や羽田八幡、北側町や築地町だけになってしまった。

翌年、再建に向けて戦災復興区画整理事業が計画され、新設される街路や公園には植栽を行い、失われた緑の回復が盛り込まれた。街路樹には苗を確保するのも困難な時代にあつて、唯一得られやすかったプラタナス、ポプラ、ヤナギなどが植えられた。当時の樹木も長い間になくなり、アメリカフウやヒトツバタコなどに植え替えられた。一方、公園の植栽は大崎島辺りに焼け残っていたヒマラヤスギの幼木が苗木として植えられ、今では15mを超える立派な高さに生長している。

また、牟呂用水沿いにはトウカエデ、ヤナギ、ツツジ、サザンカなどが植えられており、市街地にあつて潤いのある景観を醸し出しており、大切にしたい風景となっている。



公園名	主な公園樹木や修景施設
大塚公園	ナンキンハゼ、プラタナス、ヒマラヤスギ、クスノキ、マサキ、キンモクセイ、アジサイ、フジ棚、花壇
花田公園	ヒマラヤスギ、クスノキ、イチョウ、トウジュロ、サンゴジュ、クロガネモチ、マサキ、フジ棚、花壇
百北公園	アオギリ、ヒマラヤスギ、ソメイヨシノ、ケヤキ、サンゴジュ、ハクチョウゲ、マサキ、フジ棚、花壇
羽田上公園	アオギリ、カンヒザクラ、プラタナス、ヤマボウシ、ハナモモ、クスノキ、ハクモクレン、フジ棚、花壇
築地公園	サルスベリ、サザンカ、イスノキ、アジサイ、花壇

平成12～15年（2000～03）には公園内に花壇が新設され、校区民によって四季折々の草花が植えられ、除草を行って美しい町づくりが進められてきた。その功績が認められ平成14年（2002）には国土交通省より第13回「みどりの愛護」の全国功労表彰を受けている。

また、豊橋市は平成18年（2006）8月1日の市制施行100周年を記念して平成17年（2005）3月に豊橋巨木・名木百選を選んだが、校区からは宮川工機(株)南の崖下のムクノキと浄慈院のサルスベリが選ばれた。

(図中★印)

花田では緑の減少に伴い、見られる鳥たちも少なくなりました。けれどもスズメ、カラス、キジバト、ムクドリ、ヒヨドリなどその地域に住み着いた鳥類は、まだまだ1年を通じて見ることができる。また、夏は山地で繁殖し冬に平地に降りてくるウグイス、メジロ、ハクセキレイ、シジュウカラ、モズ、ジョウビタキなどの季節によって移動する鳥類や、夏に南方から日本に渡って来て繁殖し冬に暖かい南に渡るツバメのような鳥などは今でも目にすることができる。一方、鳴き声がかわいいヒバリや大空をゆったりと飛ぶトビなどは都市化によって見られなくなった鳥たちである。身近な鳥の中には都会のゴミ袋を荒らすカラス、6～10月にフンや鳴き声で苦情の絶えぬヒヨドリなど迷惑な鳥もいる。

### (3) 各町内の紹介

#### <花田一番町>

花田一番町は昭和34年（1959）7月31日、それまであった花田町字流川を中心に字西宿、字齊藤の各一部が合併されてつくられた比較的新しい町内である。

この地域は豊橋駅西から北西に位置しており、町内には飲食店・商店・金融機関・医療機関などがあり、豊橋駅西の玄関口としての様相を呈している。南側には牟呂用水が流れ、春には川面に映える柳の新緑やツツジなどの色とりどりの花が咲き乱れ、美しい雰囲気をかもし出している。

花田一番町内会の区域に居住する住民は平成17年（2005）10月1日現在、228世帯で人口は513人である。



花田一番町

#### <花田二番町>

花田二番町は、かつて、羽田村の南部に位置し、南羽田という町内会で呼ばれていた。

現在の花田二番町は第二次世界大戦後の土地区画整理によって、昭和34年（1959）7月31日から花田町字大塚を中心として構成され、現在に至っている。

豊橋の西部地区の花田校区は、製糸工場を中心として栄え、発展してきた。その中心的存在が花田二番町であった。町内の約30%が製糸工場で占められており、現在の太塚公園も宇藤製糸の跡地であり、大きな煙突が立っていた記憶がある。

花田二番町内会の区域に居住する住民は平成17年（2005）10月1日現在、140世帯で人口は335人である。



花田二番町

#### <羽田町>

古老の覚書によると、羽田町は明治の中頃まで「羽田村<sup>なかごう</sup>中郷」と言われ、そこに38世帯が住んでいた、と記されている。明治39年（1906）以後になると、通称「羽田<sup>はだなか</sup>中」と言われていた。その名残として昭和8年（1933）に建てられた羽田町公民館には、「羽田中集会所」という表札が現在でも掛けられている。昭和34年（1959）7月31日から字名が分離、合併して新しく「羽田町」の町名が成立した。

江戸時代には浄慈院、清源寺、羽田野敬雄などの寺子屋があり、さらに慶応3年（1867）には万卷の書を有する羽田八幡宮文庫が建てられていた。羽田文庫は羽田村の文化の殿堂であり、また吉田（豊橋）の文化の源泉地であった。

羽田町内会の区域に居住する住民は平成17年（2005）10月1日現在、211世帯で人口は615人である。



羽田町公民館鬼瓦

### <北側町>

北側町の範囲は、東は新幹線沿線から、西は新栄まで、北は国道23号線に面した細長い町内である。町名は江戸時代から北側と呼ばれており、明治時代には戸数が28戸あったことが記されている。

昭和20年（1945）の戦災では、町内の三分の二が戦火に遭わなかったため、昔のものが多く残されている。

その中には江戸時代「吉田三銘水」の一つとうたわれた「栄泉」がある。これは現在のイチビキ第3工場西の信号機の真下において、夏になると多くの人の喉を潤していたという。しかし、同15年（1940）道路開設により道路下となったため、町内の有志の協力により、北側町公民館に「祠」だけが御遷宮された。また、「栄泉」のほとりにあった大弘法（大正4年後藤弥十郎氏の建立）も北側町の西の一角に移築されている。

北側町内会の区域に居住する住民は平成17年（2005）10月1日現在、340世帯で人口は1,051人である。



北側町大弘法

弘法大師像は、頭が約70cm、膝頭から肩まで約2m、台座約170cm程の大きな御本体である。



羽田上公園花壇

### <稲場町>

江戸時代、「稲の束を干す場所」という意味でつけられたのが「稲場」という地名だといわれる。

昭和20年（1945）6月、空襲によって廃墟と化した中から新しい町名が生まれた。昭和28年（1953）4月1日、豊橋総代会が発足され、稲場町は百度町から分離してできた町名である。稲場町の地域は、花田校区のほぼ中央に位置している。小さい町ではあるが、同28年、他の町にない自警団が組織され、町の警備や防災などで活躍してきた。

町民の長年の悲願であった公民館も、町内の有志の人から建物を寄附して頂き、同43年（1968）9月一部改造して完成された。また町内にある羽田上公園の花壇は、老人クラブと町民が協力して四季折々の花を育て、人々の憩いの場となっている。

稲場町内会の区域に居住する住民は、平成17年（2005）10月1日現在、121世帯で人口は380人である。



百度町秋葉神社

### <百度町>

初めて「百度町」を見て、「ズンドウチョウ」と読み切る人はまずいない。それは百度町の名称が校区行政区内においてのみ使われているからである。百度町の由来は、伝えられる「百度屋敷」の所在から来ていると考えられるが、ではいつから地域行政区内で使われ出したかは定かでない。古来からの名を残す百度町も度重なる分割で今では小規模町内となってしまった。70歳以上の長寿者は74名の多きを数えるが、55名の小学生以下の若い芽が育まれているのは頼もしい。町内は自営業者が少なく勤め人がほとんどだが、小規模町内だけに、そのまとまりの良さは強みである。

百度町内会の区域に居住する住民は、平成17年（2005）10月1日現在、170世帯で人口は450人である。



築地町公民館

### <築地町>

戦国時代羽田村に「百度屋敷（約500年前石原百度兵衛または鋤柄百度右衛門と呼ばれた郷士の古城）」があり、その辺り一帯は羽田村字百度屋敷と呼ばれていた。今では百度屋敷跡（現在豊国工業敷地内）の周囲に植えられた巨木、崖や斜面の所々に「つわものどもが夢の跡」を偲ぶのみになってしまったが、現在の築地町もそれに連なる地域である。

明治39年（1906）8月、豊橋市が誕生すると豊橋市花田町字築地となり、戦災復興後、町名変更が行われ、豊橋市築地町と改称された。しかし、区画整理未済地が一部そのまま花田町字築地として残り、現在に至っている。

築地町内会の区域に居住する住民は、平成17年（2005）10月1日現在445世帯で、人口は1,482人である。



西羽田ええじゃないか

### <西羽田町>

西羽田という地名の記録は今から200年前の文化年間の古記の中に見られるが、慶応3年（1867）7月23日花田校区で最初に伊勢神宮のお札が降った場所である。このお札降りは牟呂村からおこり、西羽田・吉田（豊橋）へと伝わり、やがて全国で「ええじゃないか」という運動をまきおこしていったが、当地はその発祥の地なのである。

明治11年（1878）12月28日、羽田村と花ヶ崎村が合併し、花田村となった。花田村の小字には堀先・小松・大塚・野添・五丁・築地・往還東・往還西の一部が合わさって、昭和34年（1959）7月31日西羽田町となった。

この地区は花田校区の南西部に位置し、花田小と羽田中の2校が町内にあり、いわば校区の文教地区となっており、比較的閑静な住宅街である。

西羽田町内会の区域に居住する住民は、平成17年（2005）10月1日現在、585世帯で人口は2,200人である。

## 第2章 歴史と生活

### 1 原始・古代の花田

#### (1) 石塚貝塚(縄文前期・5～6000年前)

石塚貝塚は、花田町字石塚にあり豊川の沖積地を見下ろす洪積台地の端部に位置している。

豊川流域において確認されている貝塚のうち最も古いもので、貝類構成もハイガイを主体とする縄文時代前期の貝塚の特徴を示しており、重要な存在といえる。

貝塚は、市街地の中心に位置しているため、今では住宅や寺院が建ち並び、現状では貝塚の確認はできない。しかし、大聖寺という寺院や民家の建物の下に残存していることは、調査で実証されている。

以前、久永春男氏らによって小規模な発掘調査が数度行われているが、報告がなされていないため正確な発掘年度、回数などは不明である。



石塚貝塚

貝塚は、ハイガイを主体とする下層の貝層と、ハマグリを主体とする上層の貝層からなっている。

下層からは厚さ3mmほどで土器の表面に指跡や細い線のついた薄手の縄文土器(石塚下層式土器)が、また上層からは貝殻を押しつけた跡がついた土器(石塚上層式土器)が見つかっている。

また、この貝塚からは、たたいて作った石の斧や子どもの人骨も一体見つかっている。

#### (2) 牟呂王塚古墳(古墳時代・3～7世紀)

**集落跡の遺跡** 北設楽郡設楽町の段戸山(標高1,152m)を源流とする豊川は、水の流れが豊かな川で、何万年もの長い間に、幾度となく氾濫を起こしてきた。そして、多くの土砂が下流に運ばれ、これが堆積して川の中には島がつくられ、川の周りには堤防のようなものがつくられた。また、冬の北西からの強い風や潮の流れなども土や砂を寄せ、こうして出来た洲や窪地には、ヨシやガマなどが生い茂って肥沃な土地となっていた。人々は、こうした低地に手を加え、堤を作り、水田を作って米作りを始めたのである。

瓜郷遺跡は、豊川のこうした低地に作られた集落跡である。この遺跡は、弥生時代中期から後期にかけての遺跡で、豊川下流域にある弥生遺跡の中でも低湿地遺跡として特に有名な集落跡である。花田や牟呂の台地に広がる低地にも、瓜郷と同じように米作りをして暮らしを営んでいた人達が存在していたようである。

**有力者達の墓** 米作りの農耕生活が安定してくると、各地にムラができ、更にクニといわれる集団ができた。この集団の首長（地域の支配者）はムラびととの差を強調するために、それぞれ特色のある、土を盛り上げた墳丘の墓を築き始めた。ところが、3世紀後半から4世紀の初めになると、地域の特色を持つ墓は少なくなり、それよりもはるかに大きな前方後円墳や前方後方墳が多くなってきた。こうして古墳時代が始まり、7世紀頃までの400年余の間、日本各地で様々な古墳が築かれていくのである。

日本の各地に残されている前方後円墳は、有力な豪族達が同じ約束ごとに基づいて古墳づくりをしていたことを示しており、大和王権の支配に組み込まれることになった地方豪族が、大和王権の許可を受けて築造したものであろうと考えられている。この築造は、大和王権に連なる特別な豪族にのみ許された権力の象徴なのである。豊橋市域には13基の前方後円墳が確認されている。

4世紀 (前期)	権現山1号墳(38m)(石巻本町) 権現山2号墳(33m)(石巻本町)
5世紀 (中期)	東田古墳(50m)(御園町) 向山1号古墳(43m)(石巻西川町) こんぞうぼう古墳(19m)(大村町) 火打坂1号古墳(20m)(大岩町)
6世紀 (後期)	三ツ山古墳(34m)(牟呂町) 弁天塚古墳(43m)(賀茂町) 車神社古墳(42m)(植田町) 狐塚古墳(34m)(石巻平野町) 妙見古墳(51m)(老津町) 馬越長火塚古墳(64m)(石巻本町) 牟呂王塚古墳(約40m)(牟呂市場町)

このうち上記の馬越長火塚古墳は、築造さ

れた時期と規模、多くの副葬品からこの地方で大きな力を持った国造クラスの墳墓であろうと推察されており、これ以外の6世紀の古墳は、その規模から国造の下的有力者のものと考えられている。

古墳時代に豊橋市域で築造された古墳は、円墳・古墳群を始め、4基の前方後方墳や13基の前方後円墳などの700基がある。花田付近には、古墳時代前期の比較的早い時期に三河湾の海上交通を支配した首長の墓と考えられている牟呂町の市杵嶋神社古墳（前方後方墳推定60m）と柳生川の河口の北側台地にある牟呂王塚古墳とがある。牟呂王塚古墳は明治時代に発掘調査が行われ、圭頭大刀や杏葉・馬鈴・耳環などの豪華な副葬品が出土した。また、豊川河口付近を支配していた豪族のもと考えられている三ツ山古墳（牟呂町字坂津にある三ツ山児童公園内）もあり、平成10年（1998）度から12年（2000）度にかけて発掘調査が行われ埴輪や大刀、馬具を始めとする多くの副葬品が出土している。このように、花田校区周辺には多くの古墳が築造されていたのである。



牟呂王塚古墳跡 王塚天王社

### (3) 古代文献に記載された幡太郷

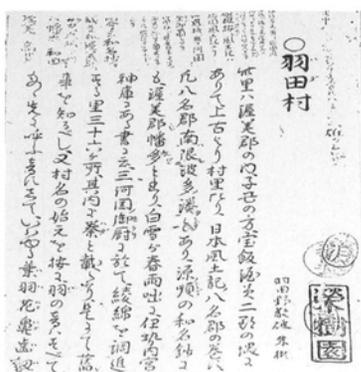
花田校区の土地は古代、「幡太・波多・秦・幡多」と呼ばれ、渡来系の秦人が住み、白鳳元年には宇佐八幡宮の分霊社として羽田八幡宮が創建されたと伝えられている。

古代の文献によると「幡太郷」というところに「渡し舟」があり、その「渡し口」は「波多湊」と呼ばれ、現在の羽田八幡宮の西北にあったということである。

①養老4年(720)5月21日、日本で最初に編纂された国史『日本書紀』の中に花田校区に「波多湊」があったことが記されている。

②日本最古の百科事典ともいえる『和名類聚鈔』は、平安時代の承平年間(931~38)に源順の手により編纂された。その中で三河国・八郡(碧海、賀茂、額田、幡豆、實飫、設楽、八名、渥美)の内、渥美郡・六郷の中に「幡太」と記されている(幡太、和太、渥美、高蘆、磯部、大壁)。幡太は「はだ」と読み、この地方は奈良時代から平安時代にかけて「幡太」と呼ばれていた。多くの学者が「幡太」=「羽田」説をとっているが、「渥美郡鼻村」と考える学者もいる。明治6年(1873)10月花田小学校の前身を「幡太学校」と名付けていることから、花田校区のことだと考えるのが妥当であろう。

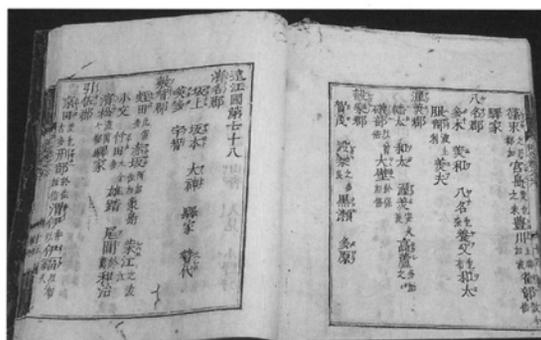
③貞治3年(1364)、伊勢神宮領のことが書かれていた『神鳳鈔』の中に、「秦御園」がある



羽田村の記録

と記している。したがって、南北朝時代(14世紀)から戦国時代にかけて、花田校区は伊勢神宮の神領であったと考えられる。

こうした事実からも、この校区は千年以上前から存在し、数々の文献に記された歴史ある土地であったことが分かるのである。



和名類聚鈔



平安時代の百科事典(和名類聚鈔)



志香須賀の渡し(想像図)

志香須賀の渡しは、承和2年(835)の太政官府に飽海(豊川)の渡しとして記録されている。

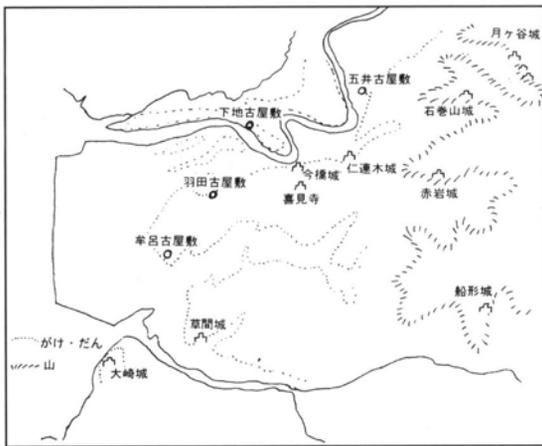
## 2 中世の花田

### (1) 百度屋敷の人々

**戦国の土豪** 室町時代の後半にあたる戦国時代になると、荘園制度は次第に崩壊し、有力農民は土地を私有化して名田としていった。その中のあるものは領主への道を歩いていった。これらの人は、国人とか土豪と呼ばれる人々である。

彼らは自分の集落の周りを堀でめぐらし、堀からかき上げた土等で築いた土塁で守られた住居を構え、有力な名主を支配下に置き独立していった。古屋敷とか古城址として伝わっているのがそれである。

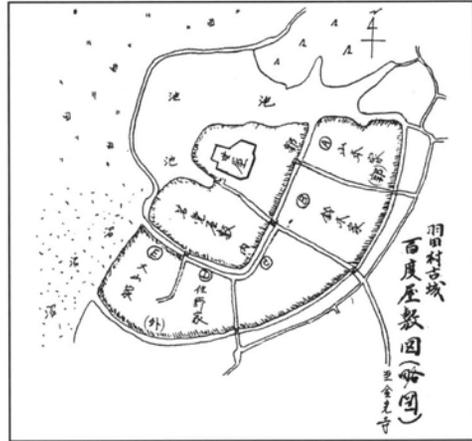
普段は田畑を耕す農耕生活が中心だったが、いったん戦いが始まると、土豪は領主や武将に従い、手下の百姓に槍や刀を持たせて戦に出掛けたり、外部からの襲撃に備えたのである。



古城と古屋敷—「豊橋市史」より

**百度屋敷の由来** 花田校区に百度(ずんどう)と言う町名がある。この「百度」(ずんどう)の名前の言われは、今から500年も前にさかのぼるが、石原百度兵衛という人が城主で居たと言う説と、鋤柄百度右衛門が城主でいたという2説がある。いずれも名前に「百度」(ずんど)が付くので「百度屋敷」と言うようになったと一般には解されている。

「百度屋敷」は羽田村の西方にあり、屋敷の北西には池を配置し、堀として守りをかため、南東は堀を深く掘り、土手を高く築いた堅固な居城だった。



羽田村古城百度屋敷 (略図)

**百度屋敷の人々** この時代の一般的な様式にならない、百度屋敷の中は母屋を中心に配置し、納屋や馬小屋、米倉、百姓屋敷がその周囲を取り巻く様に並んでいたようである。

百度屋敷は、古城の構成から見て、当初から城主の他に4家が存在していたと思われる。4家は平時、有事の際を問わず、多くの任務とそれ相応の権限を持って、城主を補佐していたものと思われる。有事の際に備えて食料の調達から、支配下部族の若者徴用、武器・武具の準備、戦闘技術訓練等一切の任務と責任が4家につきまっていたのである。

上記の「百度屋敷」の略図を見ると、外郭東にあるのが山本、鈴木の家、西地区に住野、大山の家であることがわかる。

現在の百度屋敷は西に豊国工業があるが、一見して住宅街である。昔は百度屋敷の東側、南の外側周辺一帯を百度と言っていた。古くから人が住んでいて、今日、「百度町」があるのも「百度」という文字、言葉に愛着を持つと同時に、大変中味の良い言葉であるからであろう。

**百度屋敷の現在** 現在百度屋敷地域内には、前述の4姓以外の姓の家が約50軒ほどある。大正中期までは、本多家を除いて1軒もなかった。



上記の地図は、住宅地図に羽田村古城・百度屋敷の位置を示したものである

## (2) 百度屋敷と今川17騎

**今川17騎（東三河17騎）** 戦国時代には、多くの郷士が東三河に土着し、多くの郷村が成立した。

林自見が著した『三州吉田記』には、今橋城を守る今川方に17人の郷士がいたことを記している。

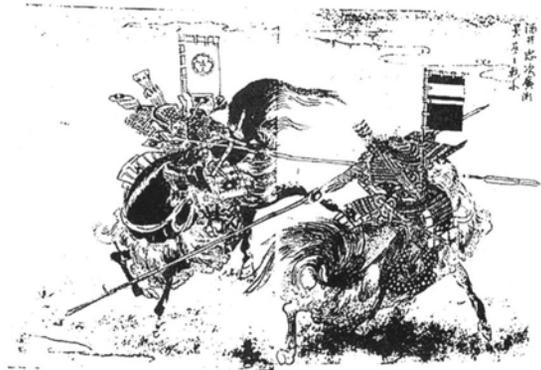
その17騎とは下の17名である。

渥美 順慶	花ヶ崎村（豊橋市）
林 雅楽	吉田（豊橋市）
川合 実戸平	渥美半島
後藤 喜四郎	大岩村神明神主か（豊橋市）
塩瀬 勝西	設楽郡塩瀬村
戸田 惣兵衛	仁連木村（豊橋市）
石田 式部	吉田天王社祢宜
渡辺 平内次	馬見塚村（豊橋市）
朝倉 七右衛門	赤岩口周辺
石原 次郎兵衛	羽田村（豊橋市）

石原次郎兵衛は、佐野知堯の著した『三河国二葉松』に「羽田村古屋敷石原百度兵衛酒井左衛門尉家人」とある。

室 金平	牟呂村（豊橋市）
白井 麦右衛門	下条村（豊橋市）

星野 一閑	行明村（豊川市）
岩瀬 可竺	長山村（豊川市）
本田 如電	篠束村（小坂井町）
舞車 小平次	下地村（豊橋市）
森 刑部	森村（豊川市）



『参河国名所図絵』より

## (3) 酒井忠次と石原百度兵衛・ 羽田村郷士都築伝四郎

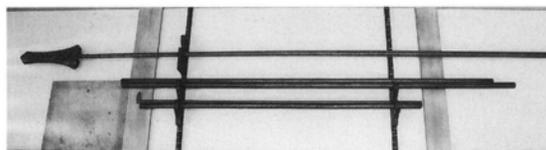
**酒井忠次と石原百度兵衛** 永禄7年（1564）徳川家康は、吉田城にいる今川氏を攻めるために、酒井左衛門尉忠次を先陣に立てた。忠次は御油、八幡、御津を苦戦の末占領した後、小坂井・牛久保で再び激戦を繰り返して、今川勢を吉田城へ追い込んだ。

戦いでは、吉田城を攻撃するに当たり、花園の喜見寺砦に陣を構え、船形山（豊橋の東にある山）二連木等の砦を守らせ、今川氏の応援を防いだ。砦や城屋敷の土豪たちも、今川氏を離れ、松平氏に味方をする動きがあった。

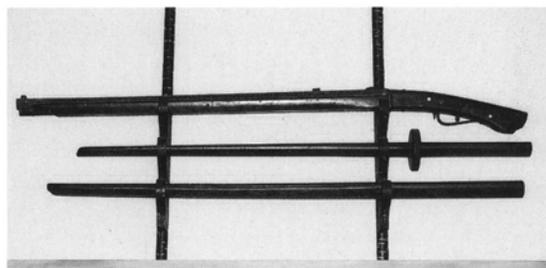
石原百度兵衛もこのような流れの中で、松平方になったようである。

石原百度兵衛は、家康軍先手大将の酒井忠次の家来として各地の戦に参加している。特に元亀元年（1570）姉川の合戦では、配下の百姓を足軽とし、その数は明らかでないが参戦し、手柄を立てている。『豊橋市史』の史

料によると、石原百度兵衛は、戦の始まる前から先制攻撃を考えて田の中に入っていった。その様子を見た信長から、戦いが始まらないのに、どうしてそんな所に居るか叱られたとあるが、石原百度兵衛の行動は、主人の忠次やひいては主君家康を守りたいという忠誠心から出たものと記録されている。



槍



火縄銃

長年、百度屋敷に住んでいる人の家に大切に保管されている武器



百度屋敷の想像図



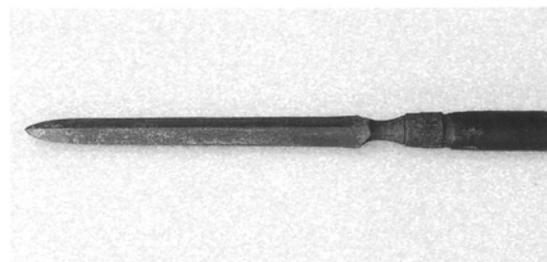
江戸時代の木版刷りの本

**羽田村の郷士、都築伝四郎** 今から約200年前の享和3年(1803)に書かれた『羽田名蹤綜録』という本の中に「この羽田村に住む都築伝四郎安値」という農夫の記録がある。この人の家は数代相続した家で、元和年中(1615~23年)に大坂夏の陣に参戦した人である。

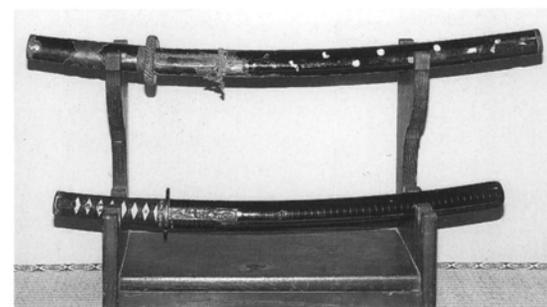
「その時、楯を持って行ったが、夏の陣が終わって持ち帰った矢根が8本今でも家に残されている」こと、その他、「この家には羽田村の田畑についての古い記録や地図などがある」とも記録されている。

この家のことについて調べてみると、この家の先祖は代々花ヶ崎村(羽根井)にいた郷士(農業をしていた武士)であったが、この家には跡取りがいなかったため、羽田村の羽田野家から養子に入った人であることがわかる。

江戸時代の中ごろには羽田村の中郷(羽田町)に住み、羽田八幡宮の5代目の神主になった家である。安政年間(1854~60年)都築の名字をもとの羽田野に改め、その子孫は今でも羽田町にご健在である。



島原の乱(1637年)に使われたと伝えられる槍



江戸時代の刀

### 3 近世の花田

#### (1) 栄泉の里——羽田村と吉田の町

**羽田村の誕生** 羽田村は寛永15年(1638)吉田方5カ村から分離独立し、「羽田村」として誕生した。明治11年(1878)12月28日、花ヶ崎村と合併して「花田村」となるまで、約240年間続いてきた。

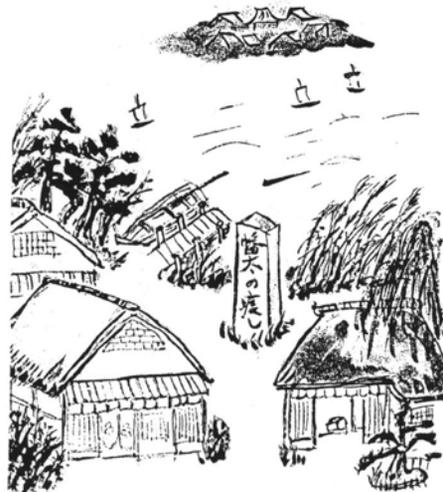
当時の羽田村は東は市民病院跡地あたりまで広がり、吉田の町の西に隣接していた。即ち現在の花田校区の大部分と松葉校区、さらに松山校区の一部を合わせた地域である。

**羽田4嶋と行政組織** 江戸時代から羽田村は主に4つの部落から成り立ち、これを羽田4嶋と呼んでいた。(1部落が現在の1町内会)

羽田4嶋と現在の町名との関係

4嶋名	現在の町名
北側	北側町
中郷	羽田町、花田一番町、花田二番町
百度	百度町、稲場町、築地町
西羽田	西羽田町

領主支配で村の長は庄屋であり、村役人として行政組織の末端であった。庄屋…村の長、年貢取り立て、戸籍事務、諸願書の作成、行政全般の業務にあたる。組頭…2名で庄屋の補佐にあたる。



御茶屋坂風景 (想像図)

羽田村庄屋・組頭

	庄屋	組頭
文化8年(1811)	本多 半右衛門	杉本 新兵衛 田中 平十
天保3年(1832)	都築 傳四郎	住野 清七 平四郎
嘉永5年(1852)	本多 半右衛門	田中 徳兵衛 田中 平重良
安政5年(1858)	本多 半右衛門	近藤 猪右衛門 作右衛門
明治3年(1870)	田中 傳次郎	近藤 久左衛門 作次郎

**吉田の町** 吉田の宿は東海道に沿う表町12町、裏町12町の24町で構成され、特に札木町は本陣、脇本陣、問屋場、旅籠などが集中する中心街であった。

吉田24町戸数一覧

(表町)	正徳2年(1712)	天保9年(1838)	(裏町)	正徳2年(1712)	天保9年(1838)
船町	84軒	84軒	天王町	16軒	15軒
田町	74	74	萱町	47	50
坂下町	28	26	指笠町	29	29
上傳馬町	64	62	御輿休町	11	11
本町	34	34	魚地町	114	125
札木町	68	68	六町	17	17
呉服町	33	33	下り町	26	16
曲尺手町	64	65	利町	19	19
鍛冶町	42	62	紺屋町	16	16
下モ町	21	23	元鍛冶町	26	27
今新町	37	57	手間町	29	28
元新町	39	27	手世古町	7	6
	588	615		357	359

**栄泉の里** 吉田三銘水で名高い「栄泉」や、すぐ西の「御茶屋坂」辺りは山紫水明の地で、その美しさは漢詩にも詠われ多くの文人が逍遙した地域でもある。



北側町公民館にある栄泉の祠

栄泉眺望二十景	
石卷山朝暉	石卷山の朝日
森下星螢	守下の螢
神明宮古松	湊町神明社の老松
石塚水鶏	石塚の水鳥
聖眼寺曉鐘	下地聖眼寺の曉の鐘
豊川帆影	豊川に浮かぶ帆船
豊城緑樹	吉田の城の若葉
照山残虹	照山に消え残る虹
三街炊煙	吉田の街のかまどの煙
鳳嶺遥翠	鳳来寺山の遙かな山並み
砥鹿嶽晴雪	本宮山の輝く雪
幡太淡霧	羽田の淡のうす霧
雨山宿雲	雨山にたなびく雲
然菅暮雨	志香須賀の夕暮れの雨
度津古驛	渡津の渡し夕暮の雨
宮路山夕照	宮路山の夕映え
風祭花火	小坂井菟足神社の花火
萩山秋晴	萩山の秋日和
吉田濁穂浪	吉田方の黄金の稲穂
磯泊山残月	幡豆の山並みの残月

## (2) 羽田村の生活とええじゃないか運動

江戸時代も後半になった安政年間（1854～60）になると、羽田村の家数は135軒、人口は634人（男291人、女343人）となり、村の中は北側・中郷・西羽田・百度の4つの嶋（現在の町内）に分かれていた。

当時の羽田村は、現在の花田校区全部と松葉校区、松山校区の一部を合わせた範囲であったが、吉田（豊橋）の町裏であった中瀬戸（中世古町）・畑中（船町）・西宿（花田町）・中柴（中柴町）・御堂裏（三浦町）・神明前（神明町）・清水（清水町）・西町（松葉町）の8ヶ所に羽田村の飛地（羽田村に住んでいる人の所有地）があった。羽田八幡宮の現在の氏子になっている地域が、おおよそ江戸時代の羽田村であったと考えられる。

羽田村の中には吉田西町（松葉町）へ通じる通称、北川（北側）街道・西羽田街道・百度街道や牟呂へ通じる牟呂街道が通っており、道幅も1間（1.8m）か9尺（2.7m）の細い道であった。村の4嶋に点々と家があり、まわりは畑や田がある農村地帯であったが、城海津・斉藤・百北・大塚・築地などには、村の墓地が点在していた。



羽田村4嶋の地図

幕末になると、羽田村からとれた米の石高は982石1斗2合であった。大部分の住民は農業を行い、衣食住など自給自足の生活をしてきた。村人の楽しみといえば、八幡宮の祭礼や豊作を祈るための社寺参詣の旅、それに、伊勢参りなどであった。江戸時代は60年に一

度伊勢神宮へ集団で参拝することが流行し、これは「おかげ参り」と言われていた。親や主人の許しを得ず、関所手形なども持たないことが多く「抜け参り」とも言われていた。船町や牟呂・大崎から船で伊勢へ行くことが多かった。

羽田村では天保の飢饉（1833～36年）や安政の大地震（1854年）にもそれほど大きな被害はなく、比較的単調な生活が続いていたが、それを一変させる大騒動が村に起こった。江戸時代も末期に近い慶応3年（1867）7月に起こった「ええじゃないか」騒動であった。



ええじゃないか（版画）



羽田野敬雄が書いた『萬歳書留控』

この頃の羽田村の様子については①浄慈院住職山澄覚禅の書いた日記『多聞山日別雑記』と②羽田八幡宮神主羽田野敬雄の書いた『萬歳書留控』があり、詳しく書かれている。それによると、慶応3年7月23日、西羽田の次郎兵衛のみかん屋敷にお札が降ったのをきっかけに8月に入ると、北側の勘右衛門、西羽田の六三郎、中郷の久左衛門、吉右衛門屋敷、西羽田の新次郎の屋敷や百度にもお札が降り、村中騒ぎとなった。



多聞山日別雑記

降ったお札の種類は、秋葉山札、富士山札、金光明最勝王経札などであった。空からお札が降ってきたことで村中が一大騒ぎとなった。何かめでたい前兆であると考えられ、お札を祭壇に祭り、神楽が行われ、多くの人々に酒や餅が振る舞われ、賑やかに祝ったという。お札が降ると村は休みとなり、酒食に興じていた。

お札降りは、羽田村から吉田（豊橋）へと伝わり、次第に激化していった。浄慈院住職山澄覚禅はその様子を慶応3年（1867）8月3日の日記の中で「魚町においては、大群衆がおかげ参りのようで、男は女装し、女は男装し、町内を練り歩いており、投げ物もたくさんあった。」と記している。

また同日、「呉服町でも男たちは顔を装い飾っており、沢山の投げ物もあった。」と書いている。羽田村では約1ヶ月間続いたお札降りで村の出費は百両にもなったと記録されている。



羽田村に降ったお札



借金証文



多聞山日別雑記（出費百両の記録）

吉田を起点に始まったお札降りは、東は関東、北陸へ、西は名古屋、京都、中国、四国まで伝播していった。

ちょうどその頃、京都では15代将軍徳川慶喜によって大政奉還（政権を朝廷に返すこと）が行われた。明治天皇による王政復古の号令が叫ばれ、戊辰戦争から、やがて明治という新しい時代へと、歴史の歯車がギシギシと音を立てて回り始めたのだった。

災害と農民の暮らし

幕末になると当時の農民は、重い年貢や物価高、自然災害に苦しめられた。上の写真は、年貢を支払うためにお金を借りた「借金証文」である。借りた金額は二両、利子は一年間に一割であった。支払いは一年後の十二月八日である。もし返済できない時のために右の下に質物となる土地が記入してある。

江戸時代末期の1両は、現在の何円？

江戸時代と現代の賃金水準を比較して計算すると、1両は約30万円にあたると思われる。

（平成18年NHK「知るを楽しむ・歴史に好奇心」より）

## 4 近代・現代の花田

### (1) 花田村の成立

260年間続いた江戸幕府は亡び、天皇を中心とした明治政府が誕生し、矢継ぎ早の大改革が断行された。例えば、土地と人民を朝廷に返させた版籍奉還（明治2年）、藩を廃止し府県を置いた廃藩置県（明治4年）、新しい税制としての地租改正（明治6年）、近代軍隊としての徴兵制度（明治6年）、このような大改革の中で江戸時代からの地名「吉田」も「豊橋」と改称され、明治5年（1872）には名古屋県は愛知県と改称されていった。

こうした改革の中にあっても、羽田村は江戸時代と同じように羽田村と呼ばれ、渥美郡に属していた。明治8年（1875）頃から、愛知県では町村合併への動きが現れていたが、明治11年（1878）7月、明治政府は「郡区町村編成法」「府県会規則」「地方税規則」のいわゆる三新法を公布した。その後、町村合併



花田村（54字）

が急速に進められ、明治11年（1878）12月28日、羽田村は隣村の花ヶ崎村との合併を行い、ここに花田村が成立したのである。

明治政府は『官撰地誌』の編集にとりかかり、明治5年（1872）、各府県に『地誌』を提出させた。花田村から政府に提出した地誌が『渥美郡花田村々誌』である。この本によって明治初期の花田村の様子が見える。以下この本によって主だった記載を拾ってみよう。

・戸数 本籍345戸（士族7戸・平民338戸）  
 ・人数 男819口（士族13口・平民806口）  
           女855口（士族13口・平民843口）  
           寺4戸 社8口 総計1,674口

○明治11年税地

・宅地 21町8反1畝3歩   ・田 105町5反  
 ・林 2町8反6畝29歩   ・畑 161町1反5畝3歩  
 ・藪 2町9反2畝17歩   ・溜池 1町5反9畝14歩

資料『渥美郡花田村々誌』\*上記の口は人の事である

合併により、人口や農地も倍増したが、生活は江戸時代と同じで、農業が中心であった。

そんな折、明治21年（1888）9月1日、花田村字西宿に東海道線が開通し、豊橋駅が創設され、田やみかん畑の中を煙を吐いて汽車が行き来するようになった。同32年（1899）1月には豊橋米穀取引所が花田村字石塚に創設され、同年3月には花田村字西宿（現豊橋駅前）に私設安藤動物園（現豊橋動物園の前身）が開園された。

このように花田村は日に日に装いを新たに、順調な発展を遂げていった。

**豊橋市の誕生** 明治39年（1906）7月5日、内務省告示は豊橋村を市制施行地に指定し、7月15日、豊橋村は市制施行の前提として花田村と豊岡村を合併した。町村合併の半月後の明治39年（1906）8月1日、豊橋市が誕生した。日本で62番目の市であった。人口も37,635人となり、盛大な市制施行記念式が湊町の神明社境内で挙行された。花田村は大正15年（1926）に豊橋市花田町と改称された。

### 市域の変遷

- 市制施行(明治39年)
- 町村合併(昭和7年)
- 町村合併(昭和30年)
- 埋立て(昭和48年以降)



## (2) 牟呂用水と花田の人々

**花田を通る牟呂用水** 牟呂用水は花田のまちなかを流れている。この牟呂用水は、吉祥山きしやうざんのふもとから賀茂、金沢を経て、牛川、旭町を通り、花田から牟呂へと、約23km余を流れる農業用水である。

明治の中ごろ、花田村の人たちは、この用水を通す代わりに、花田の越水、中ノ坪に広がる水田にも水が引けるようにと懸命に運動した。そして、明治34年(1901)に、花田や吉田方にも分水が引けるようになった。この分水は「三村用水」とか「小新川」と言われた。この用水のおかげで、水に不自由なく米作りができるようになり、米の収穫もそれまでの1.6倍に増えたと言われている。

牟呂用水は、花田の中を通ったばかりでなく、その後の人々の仕事や暮らしに大きな役割を果たしてきた。



水門の見える現在の牟呂用水

**人々の暮らしと牟呂用水** 花田の人々の仕事や暮らしは、牟呂用水と深い関係にあった。

昔の牟呂用水は、台地を開削し兩岸をその土で固めていた。用水の川底も岸も、固めてあるとはいえ、自然の土だった。

人々は、階段をつくって用水に降り、そこに洗濯場を設けた。大きな石や木の台を打ち込んでつくった、そうした洗濯場は、橋の近くに作られるのが普通だった。

洗濯機が普及してからも、水の節約のため

に、すすぎは用水で行われた。流れる水がきれいだったことや洗濯場でする世間話が楽しかったからだろう。お母さんたちが洗濯をしている間、ついてきた子供たちは、メダカをすくったり、水遊びをしたりした。

子供たちは、用水をプール代わりにして水泳もした。大塚橋の下では、安全に飛び込めるように、川底に穴を掘って深くしたそうだ。花田の子はほとんどこのようにして泳ぎを覚えていった。

冬は、水を止める時期なので、残った水が凍った。その氷の上を滑って遊ぶ子もいた。

大掃除の時には、障子用水につけて洗い流したり、盆の時には精霊流しをしたりした。また、七夕には笹流しもした。用水をせき止めて、網で川の清掃をしたときには、お金や指輪などが出てきたこともあったそうだ。

花田地区で、牟呂用水がコンクリートになったのは、昭和40年(1965)から42年(1967)にかけてである。上流では、昭和24年(1949)に工事が始まったということで、花田地区のコンクリート化は少し遅かったようだ。

コンクリートにする時に、大切な洗濯場を残してほしいと要望したが、危険だからという理由で残されなかったとのことである。

コンクリート打ちしてから、用水の流れは速く危険になった。人々は、親しんでいた水辺からしだいに離れ、人々の暮らしと用水との関係はだんだん薄れていったのである。

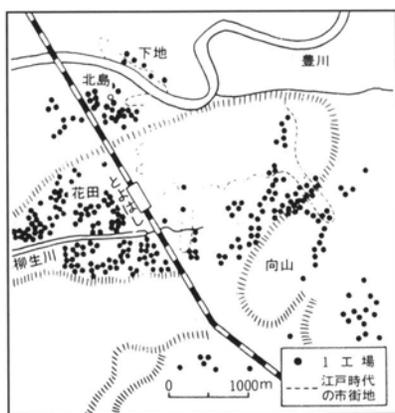


牟呂用水と花田小学校

### (3) 糸の町 — 花田

**製糸業の成り立ち** 豊橋は、明治の10年代から、朝倉仁右衛門をはじめとする養蚕や製糸の先覚者を輩出している。また、二川の小淵志ちによる玉糸製糸などの開発も行われていた。

明治40年(1907)、豊橋の製糸工場は大小で28あったが、それから十数年たった大正14年(1925)には、3倍の84に増えた。それは、豊橋が原料の繭の集散地として大変恵まれていたからだった。



豊橋駅に近く、豊川や柳生運河がすぐそばを通っていたことなどが製糸業を発展させる大切な要素となっていた。

花田は、豊橋駅に近く、交通の便に恵まれていた。江戸時代から「東海道五十三次」の宿場町の隣村として栄え、街道も整備されていた。それに、燃料になる石炭の荷揚げをする豊川や柳生運河も近くにあり、工場を営むうえで、地理的な条件に大変恵まれていたからである。

また、栄泉に代表されるように、花田は良質で豊かな水に恵まれていた。地下10mから20mくらいの井戸を掘り、製糸に使っていたが、この水は、生糸の色やつやを出すには欠かせないものだった。

それに、花田は、蚕を飼って糸を取り、産業を盛んにしようとする人々の気風がなにより強かった。そうした人々の心意気が、製糸の町、花田をつくりあげていったのである。

**製糸の町「花田」** 花田の製糸工場は、大正になって豊橋の製糸の先進地である二川から工場が移ってきたことから始まった。

大正の初めのころは、花田は竹やぶやみかん畑が広がっていた。製糸業が盛んになるにつれて、みかん畑や竹やぶが工場に変わっていった。また、工場が増えるにつれて花田の町もぐんぐん大きくなり、「糸の町・豊橋」を支える中心地になっていった。

昭和初期は、製糸業が最も盛んになり、豊橋市内には工場が百余りもあった。花田にはこうした製糸工場の80%が集まり、人口も増え、たいそうにぎやかな町になった。このころの花田の町には、たくさんの煙突が立ち並んでいた。これらの煙突は製糸工場のもので、工場では繭から糸をとって絹糸を作っていた。

多くの煙突から黒煙が立ちのぼり、町を歩いていると、近くの家々が煙のために見えなくなるなどと言われた。また、たんすの中の着物が真っ黒になってしまったり、みかん畑では、名の通った「羽田みかん」に黒い油滴がついたりして、高い値段では売れなくなってしまったと言われている。

元花田小学校の山本孝先生は、創立百周年記念の回想録のなかで、当時の様子を次のように語っています。

「花田の雀は黒い」といった人がいます。朝、教室へ行くと、前の日に掃除をした机の上にはすが真っ黒く積もっているのです。掃除を授業が始まる前にしてはどうかという話が出たほどです。教室の窓からは、黒煙たなびく煙突ばかりが見えました。町には、大小の製糸工場がひしめいていました。ばい煙こそ、糸の町花田の顔でした。」

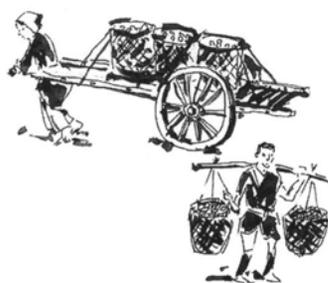
「花田の人と風土」より



建ち並ぶ製糸工場

**繭や石炭の輸送** 燃料として使う石炭は、遠く九州や山口県の宇部から運び出されてきた。そして、半田港や蒲郡港に運ばれ、はしけで豊川の岸へ陸揚げされた。

石炭は、湊町や関屋町の燃料問屋に運ばれ、荷役はそれを肩に担いで馬車や荷車に積み上げ、花田まで運んだ。町には、馬車や荷車の



ぼてふりと大八車

カラカラ、ゴトゴトという音が朝から聞こえて、やかましい程だった。

荷役の船から工場まで運ぶ賃金は、近いところで1回につき8厘、遠いところでも1銭にしかならず、1日に何回も運ばなければならなかった。

花田の町は、製糸工場が栄えていくにつれ、専門のぼてふり（天秤棒をかついでものを売り歩く人）や、荷車、馬車などの荷役の人たちも増え、ますますにぎわっていった。

**製糸工場で働く人** 製糸工場では、繭から糸を引く「女工さん」と呼ばれる女の人が多く働いていた。女工さんの出身は、ほとんどが渥美郡や南設楽郡、北設楽郡から来た人たちで、岐阜県や長野県、静岡県からもたくさんの方が来ていた。

昭和の初期の豊橋は、こうした女工さんが

たくさんいたので、男子100に対する女子の人口割合は125を数えたほどであった。

**女工さんの仕事と生活** 女工さんのほとんどは、12歳から20歳前の育ち盛りの若い人だった。大正時代の製糸工場では、朝5時から夜7時過ぎまで長時間働いて、その間休む時間もなかった。休日でも月2回ほどしかなく、大変だった。それでも、昭和10年（1935）ごろになると、働く時間が10時間、休みの日も月4日ほど取れるように改善され、少しずつ働きやすくなっていった。



昭和10年頃の仕事風景 若い女工さんが真剣に働いている。(男の人は検査をする人)

**製糸業のかげり** 昭和12年（1937）の日華事変から、次第に戦争の色合いが濃くなりはじめ、働く人や工場の設備が、戦争につながりのある軍需産業に変わっていった。蚕を飼うための桑畑も、食料のための畑に変えられ、さつまいもや陸稲が植えられた。

昭和20年（1945）6月19日の夜半、豊橋は、アメリカのB29による焼夷弾の爆撃を受け、市内の中心部のおよそ9割が焼け落ちた。花田の町も北側の一部やほんのわずかなところを残してすべて焼けてしまった。

戦後は、アメリカで発表されたナイロンが大量に生産されるようになり、日本の生糸があまり必要とされなくなった。こうした時代の流れの中で「糸の町・豊橋」を支えてきた花田の製糸業は、ついに以前のように盛んになることはなく、しだいに衰えていった。

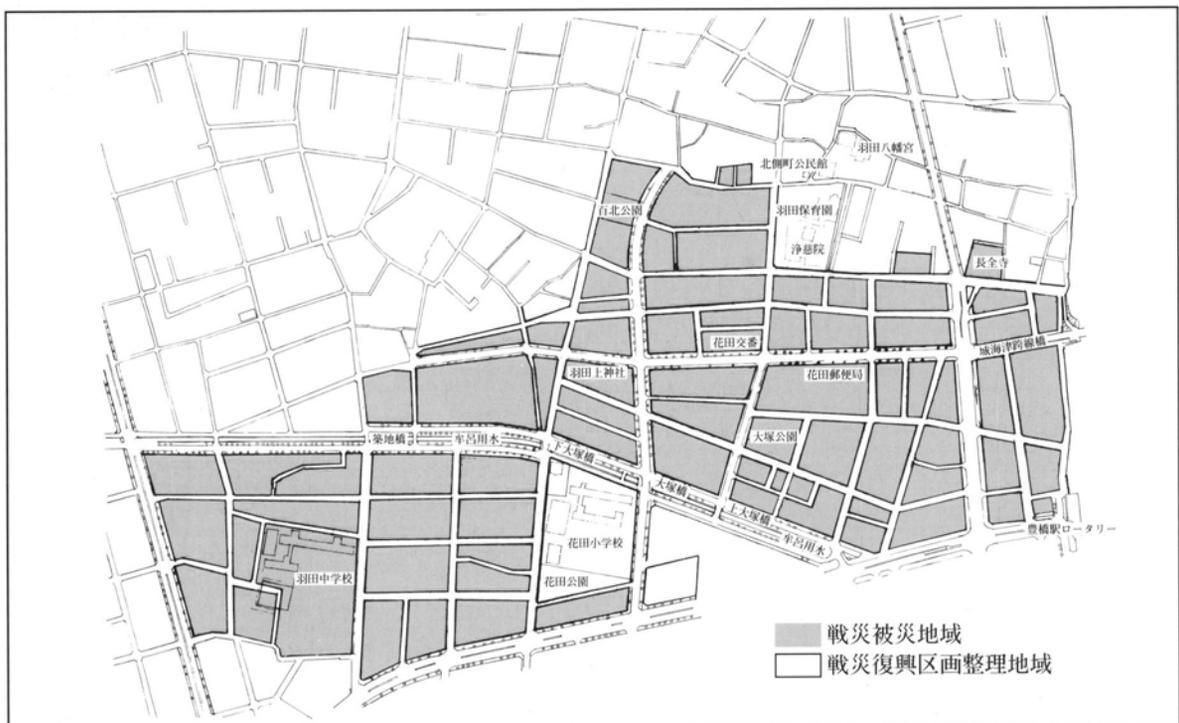
#### (4) 豊橋空襲と花田・戦後復興と花田

**豊橋空襲と花田** 昭和20年(1945)6月19日運命の時がやってきた。午後9時30分、空襲警報が発令されたが、およそ30分で解除された。一息つきながら寝床に入ろうとしていた市民を驚かせたのは、今度こそ本物の、本格的な空襲だった。午後11時43分頃柳生川運河方面より火の手が上がった。サイパン基地を発したB29は逃げまどう市民の頭上に焼夷弾の雨を降らしたのである。

これまで訓練を重ねた防空演習は、実際の場面に際してほとんど役にもたらず、人々はただ逃げのびるのに精一杯であった。20日午前3時17分頃に空襲は終わった。朝、人々が見たのは駅の三角屋根や額ビルだけを残して、ほとんど焼け落ちて、焦土となった豊橋の町であった。(「とよはしの歴史」より要約)

花田校区も全焼、全壊家屋は約80%に及んだ。花田小学校にも多くの焼夷弾が落ちたが、学校に駐屯していた兵隊の消火活動により難をまぬがれたのは幸いであった。

**戦災復興と花田** 豊橋市は焦土と化した土地を防火・防災・美観を目的とし、思い切った都市計画のもとに、街路が整然とした市街地へと、その造り直しにとりかかった。具体的には宅地の大きさを適正化して通風、採光、日照の条件を良くするために模様替えしたり、土地の交換分合・地目変換・学校・公用地の配置変区等を行う戦災復興事業を昭和21年(1946)から実施したのである。同時に公園緑地計画、街路樹植樹計画も行われた。花田校区も昭和21年(1946)9月3日の告示により見直しが始まり一部手直しをもって、昭和33年(1958)3月14日最終的に決定された。施行区域は花田町字齊藤・稲場・築地・百北・西宿・往完町字往還東・往還西であった。これらの地名は旧来通り残されたが、大塚・流川・堀先・野添・五丁の地名はなくなってしまった。ここに、新たに現在の羽田町・花田一番町・花田二番町・花田三番町・築地町・西羽田町・北側町が制定されたのである。



戦災被災地域

## 第3章 教育と文化

### 1 教育のあけぼの

#### (1) 寺子屋の教育

明治5年(1872)に学制(近代学校制度に関する日本最初の法令)が發布されたが、それ以前は吉田藩(豊橋)の武士の子は藩校時習館に、庶民の子弟は寺子屋に通った。この他に漢学・国学・洋学などの学者の開いた私塾などで学ぶ者もいた。

これらの学校は江戸時代からあり、幕末から明治にかけて広く(県内に約4千)普及していた。江戸時代の終わり頃、豊橋には250あまりの寺子屋があったが、羽田村にも下記のような3つの寺子屋があった。

名称	師匠氏名	身分	科目	創立	廃止	寺子数	所在地
浄慈院	善門 覺円 山澄 覺禪	僧侶	読・書	天和期 (1681~	明治 6年	57人	羽田村
松蔭学舎	羽田野敬雄	神主	読・書	文政期 (1818~	明治 6年	6人	羽田村
清源寺	知 順	僧侶	不明	不明	明治 5年	15人	羽田村 (現松葉校区)

羽田村寺子屋一覧表

寺子屋の先生を「師匠」、寺子屋で学ぶ生徒のことを「寺子」とか「筆子」といい、入学することを「寺入り」とか「登山」ともいった。寺入りする年齢の多くは7~8歳であった。就学年限も3~4年から6~7年、10年以上にも及ぶ者もいた。



筆子地蔵

寺子屋の師匠となる人は、僧侶・神官が最も多く、庄屋、医者、町人など様々であったが、それぞれ学問や知識にすぐれ、書道の上手な人たちであった。

教育の内容はいわゆる「読み・書き・そろばん」だが、その中心は「手習い」であった。朝8時頃から午後4時頃まで師匠の書いたお手本を読んだり書いたりして内容を理解していった。



寺子屋の習字用具と本

(ア) 浄慈院の寺子屋 浄慈院は、延宝8年(1680)の開山当初から寺子屋を開き、明治6年(1873)まで連綿として続いた。太平洋戦争では幸い戦火に遭わなかったため、当時を偲ぶ机、手本、和本などが今も多数残されている。

浄慈院には文化10年(1813)から明治19年(1886)まで3代の住職によって書かれた『多聞山日別雑記』という日記が残されている。この日記によって、江戸時代に行われていた寺子屋風景の一端を知ることができる。

・登山（入門）について

羽田村や花ヶ崎村の子供たちは7～8歳になると、毎年1月半ばすぎに親や祖父が寺に来て「登山願い」をしている。寺で許可されると、入門は毎年2月の初午の日であった。寺では当日、山門に幟をたてて新入の子供たちを迎えた。

安政4年（1857）2月12日の日記に「今日ハ初午手習登山…西羽田七左衛門、仲蔵八才・北川富吉、おりさ九才…」とあり8・9・10歳の男子8名、女子7名の計15名が入門している。その年の寺子（生徒）は53名であった。親は羽織を着用して習字道具と文庫をもち、寺子も礼装して来ており、各自赤飯をつめた重箱を持参している。おそらく先輩の寺子と会食して仲間入りをさせてもらうためであろう。寺側では入門祝いとして一人一人の寺子に巻筆を2本ずつ与えている。

53人の寺子を師匠3人（住職と寺の弟子2人）で指導している。

・教材（教科書）について

教材は「いろは歌」から始まり、『村尽・国尽・是非短歌・庭訓往来』などを学んでいた。朝9時頃から午後4時頃まで、習字や本読みなどを学習していた。日記に「晩方・伝次郎入来、大学持参、序読む。世更けて帰る」などという記録もある。伝次郎は大人になっており、四書五経の一つである『大学』という程度の高い教材も使っていたことがわかる。



寺子屋の教科書

・寺子屋の行事について

寺子屋の行事は、ほとんど毎月あったことが日記に書かれている。

2月	初午の日に登山。2の午の日は手習いが休みとなり、山門に幟を立てている。
3月	3日 桃の節句。
4月	8日は花祭（釈迦降誕会）寺子が各自花を持参し、花で花御堂の屋根を葺いている。
5月	菖蒲の節句。柏餅を持参し共に食している。
7月	七夕の節句、6日に短冊を書き、7日に笹につるす。夜は親が見に来る。8日に笹を持って師匠と共に豊川へ流しに行っている。
8月	田の面の節句（八幡宮の祭礼）。
9月	重陽の節句（寺子が餅をもってくる）。
10月	神送り（寺子が亥の子餅を持参する）。
12月	24日から26日までに書初めを書く。26日までで終了し、寺子は机を家を持って帰る。
1月	昨年の暮れに書いた書初めの作品を寺の台所に貼る。4日に節絵があり、11日から手習いが始まる。

毎月25日に天神祭を行い、菅原道真の掛軸を掛け、学問や書道の上達を願っている。幕末に寺子屋が普及し、学制による学校教育を実施できるものとなった。



天神様

## (2) 寺院と神社の建立と現状

花田校区には寺院が4ヶ寺、神社が2社、現存している。ゆるやかな時の流れとともに息づいてきた庶民信仰の息吹きが今も感じられ、昔ながらの落ち着いた雰囲気をかもし出している。

### (ア) 万年山 長全寺 (花田町字齊藤73)

羽田町の交差点の東側に長い白壁の塀が見える。鉄筋コンクリート2階建ての堂々とした本堂。その右側には庫裡がある。山門には「万年山」と書かれた扁額が掲げられ、その傍らに「長全寺」と書いた寺標がある。

本堂の左側には、長全寺の開基（寺を開くとき援助した人）とされている羽田野九郎右衛門尉の一族の墓と江戸時代後期の羽田八幡宮の神主であった羽田野敬雄（栄樹）の墓がひっそりと祀られている。



長全寺

当寺の創立は、永禄3年（1560）と伝えられ、開山（寺を開いた僧）は龍拈寺第5世悟慶宗鶴大和尚と言われている。今から200年前の文化3年（1806）に郷土史家山本貞晨によって書かれた『三河国吉田名蹤綜録』の羽田村の中に「羽田村にあり。浄慈院より辰巳の方二百歩程にあり、禪宗曹洞派吉田山龍拈寺に属す。万年山と号す。本尊11面観世音菩薩立像…」とあり、「弁天社」もあったことが書かれている。現在の本尊は聖観世音菩薩である。天保3年（1832）2月、岡崎城外堀にあった寺院の本堂をゆずり受けて再建され

た。この本堂が明治7年（1874）1月8日「渥美郡第10中学区第4番小学幡太学校」として使用され、翌明治8年（1875）10月2日、境内に渥美郡の中で最初の校舎が建てられた。その後、校舎は花田村西宿前、北新起に移され、明治25年（1892）5月に花田村立花田尋常小学校と改称された。

江戸時代から建立されていた長全寺の建物は、昭和20年（1945）6月の空襲により、山門一字を残して全焼した。昭和54年（1979）本堂と庫裡が再建され現在に至っている。

### (イ) 古杉山 察順院 (花田町字齊藤7-4)

長全寺の墓地の北側にある小道を東の方へ歩いて行くと、「浄土宗」「察順院」と書かれた石の門が見えてくる。こぢんまりした境内には石造の水子地藏と地藏尊が祀られている。寺の周辺は閑静なたたずまいである。

当寺の創立は、大正7年（1918）1月であり開山は大橋通り一丁目の清源寺住職察順和尚である。初め浄土宗の一私庵として建立されたが、昭和17年（1942）3月、法人教会花田教会となり、同28年（1953）11月公称寺院察順院となって今日に及んでいる。本尊は阿弥陀如来座像である。太平洋戦争では戦災を免れたため、境内と建物はほぼ創建当時のものである。



察順院

### (ウ) 宝林山 金光寺 (西羽田町245)

花田小学校の北西の角にある瀟洒な寺院が金光寺である。境内には大正12年（1923）に建てられた石造阿育王塔と香華の絶えること

のない観音菩薩が祀られている。境内はごぢんまりしているが墓地は広く墓碑が整然と並んでいる。



金光寺

当寺の創立は、天文8年（1539）、開山は実誉善故和尚である。本尊は阿弥陀如来立像である。文化3年（1806）に刊行された『三河国吉田名蹟綜録』の羽田村の中に「宗旨浄土鎮西派にして弧峯山悟真寺に属す。正親町院御宇天文八巳亥年開基す」と記されている。

明治8年（1875）、一時廃寺となり、西羽田の村持の私庵となったが、百度町の山本勝次郎氏らの協力を得て、苦心奔走の結果、昭和8年（1933）10月、公称寺院となった。

昭和13年（1938）春、本堂と庫裡が新築された。太平洋戦争中戦火を免れたため、本堂も当時のままである。平成16年（2004）庫裡を新築し、現在に至っている。

(工) 多聞山 浄慈院（花田町字百北68-1）

江戸時代に建てられた山門をくぐると、長く続いた石畳。正面にはどっしりとした本堂。石畳の右側には250年を経た「さるすべり」。苔むした瓦と白壁の庫裡、左側には往時を偲ばせる観音堂、地蔵堂、宝篋印塔。緑の木々にひっそりと息づく歴史と自然の織り成す豊かな色彩。ここには日常生活と異なる空間が漂っている。

当寺の創立については『浄慈院縁起』によると、初め下野国（栃木県）にあったが、住職忍誉良濟和尚は本尊押合地蔵尊を負って寛

文7年（1667）吉田（豊橋）の馬見塚村へ来て一寺を創設した。さらに高須新田に移ったが、高潮に遭ったため、延宝8年（1680）4月8日、羽田村のお杉林（現在地）に移転し、寺を建立して開山となったということである。



浄慈院

その時、吉田藩主小笠原長祐の重臣雨森氏・鳥羽氏・梅村氏の三氏が周施助力をしたと記されている。宝永7年（1710）5月吉日、本堂を新築（現在も使用）し、伝鞍作鳥仏師の釈迦如来座像を本尊とし、大日如来座像、弥勒菩薩座像を新造して浄土・律・真言・天台の四宗兼学の寺風をなして明治維新まで続いた。

境内には享保12年（1727）建立の地蔵堂と享保20年（1735）造立の石造宝篋印塔、文化14年（1817）建立の護摩堂（現在は観音堂）などが現存している。『三河国吉田名蹟綜録』に「多門山浄慈院、八幡社より西の方十歩、宗旨真言律、本尊押合地蔵菩薩…」とある。現在の宗旨は浄土宗西山禅林寺派である。昭和20年（1945）6月の空襲では戦火を免れたため、永享7年（1435）と書かれた「懸仏」や歴代住職の書いた『多聞山日別雑記』や古文書類など多数現存している。



来迎図

## (オ) 羽田八幡宮 (花田町字齊藤54)

羽田八幡宮参道の入口に「結婚式場羽田八幡宮」と書いた大きな看板。そのすぐ裏に「総産子安全、文政2巳卯11月吉日、羽田野上総源敬道、寄附之」と書かれた「永代常夜燈」がある。その前に朱塗りの大鳥居。長い参道には歳月を物語る松並木。正面には重厚な八幡造りの拝殿と本殿が建っている。今までこの拝殿にどれほど多くの人々がぬかずいてきたのであろうか。手筒花火で有名な羽田八幡宮は、今も校区のシンボリック的存在である。



羽田八幡宮

羽田八幡宮の創立は、社伝によると白鳳元年(672)と伝えられ、祭神は応神天皇であり、宇佐八幡宮の御分霊社である。古来より武将の崇敬が篤く、『今川氏真安堵状』(湊町神明社蔵)によると、東三河地方を平定した今川氏真是永禄4年(1561)、社領13貫700文と神主屋敷、田地4段を寄進したとある。

文化3年(1806)の『三河国吉田名蹤綜録』の羽田村に「八幡社、羽田村にあり、今川氏神明社古証文に当社領の事見えたり…」とある。吉田藩主の崇敬も篤く、社殿の造営等の寄進をしている。

幕末から明治にかけて神主であった羽田野敬雄ひらたあつたねは平田篤胤の門下であり、国学者として

知られ「羽田八幡宮文庫」を創設した。境内には天満宮、栄川稲荷社、中島神社などが祀られている。天満宮の左側に「惟神」と書かれた平田篤胤ひらたあつたねの石碑が建てられている。

昭和39年(1964)本殿が改築され、昭和50年(1975)には社務所の造営が行われ、現在に至っている。



惟神の碑



平田篤胤の肖像

## (カ) 羽田上神社 (花田二番町32)

羽田上公園の横に羽田上神社がある。神社の右隅に、「村中安全、常夜燈、文政3辰庚年」と書かれた灯籠があり、正面には鳥居が建っている。鳥居の左側には社務所があり、正面には本殿がある。祭神は素盞鳴命すさのおのみことである。

羽田上神社の由来は、寛政10年(1798)焼失し、再建のため不明である。昭和6年(1931)社号を現在の<sup>うぶすながみ</sup>ように改めた。この神社は花田校区八町内の産土神である。昭和20年6月の空襲により焼失されたが、同27年復興された。毎年7月31日、茅の輪ちのわ神事が行われ、その輪をくぐると病災を免れると伝えられている。



羽田上神社 (東愛知新聞社提供)

### (3) 羽田八幡宮文庫と羽田野敬雄

羽田八幡宮参道の中ほどの右側に古びた小さな門がある。門の右側に「登録有形文化財 羽田八幡宮文庫旧蹟 文化庁」と書かれた木札が掲げられている。ここが近代図書館の先駆をなした「羽田八幡宮文庫」址である。



羽田八幡宮文庫神門

羽田八幡宮文庫は、嘉永元年（1848）9月羽田八幡宮の神主であった羽田野敬雄によって創設された。

羽田野敬雄は伊勢国（三重県）松坂の国学者本居大平（宣長の養子）や幕末期の尊王攘夷運動に大きな影響を与えた平田篤胤の門人であった。幼少より読書家であり、蔵書家でもあった羽田野敬雄は、後進への学問に便宜をはかろうと考え、文庫の設立を計画した。嘉永元年5月、文庫設立の資金を作るため、羽田野敬雄ら15人の発起人が世話をし、一口3両の文庫造立講をつくり、同学・同好の士に呼びかけ資金を集めた。

その結果187両3分の金が集まったので同年6月、吉田藩へ文庫造立願いを提出し、2間に3間（約20m<sup>2</sup>）の土蔵造りの書庫を屋敷内に設立した。

さらに、書籍の収集を図るため、「奉納書籍勸進」の引札（チラシ）を作成して各方面に配布した。その中には「一冊一葉の書たりとも何とぞ御寄附下され候様希奉り候」と切々たる勸進文が書かれている。文庫設立13年後の文久元年（1861）に蔵書数は7867巻と

なり、慶応3年（1867）には蔵書数も1万巻に達した。時に羽田野敬雄70歳であった。

書籍寄贈者の中には、『類聚国史30巻』を寄贈した、時の公卿三条大納言実万を始め、水戸中納言徳川斉昭、平田鉄胤、吉田藩主松平信古らがいる。松平信古は文庫永代料として、年米10俵を与え、数回にわたり文庫を訪れて、その労をねぎらったといわれている。現在、豊橋市中央図書館に三条実方が羽田文庫に送った「積中外諸典」と書いた額が掲げられている。

安政3年（1856）7月、羽田文庫幹事である佐野権右衛門（俳名蓬宇）他3名が文庫の傍らに読書所を建てた。松の下陰にあるところから「松蔭学舎」と呼ばれ、羽田文庫に閲覧所が設けられ、図書館としての形態が整えられていった。

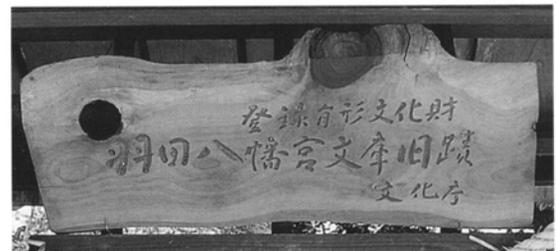
羽田文庫は様々な活動を実施している。

その一つは有名な学者に依頼して公開講義を行ったことである。安政2年（1855）2月、幕末から明治初期にかけて活躍した国学者、大国隆正は3夜にわたって講義をしている。また江戸後期の儒学者、藤森弘庵なども講義をしていることが記録に残っている。

その二は、書物の出版をしたことである。

時習館教授、中山美石の著した『飢饉の時の食物の大略』の板木が文庫に寄贈されたので『ききんのこころえ』と改題して刊行し、無料で人々に配布している。

その三は、文庫の慈善事業である。



羽田八幡宮文庫

嘉永7年（1854）11月4日におこった地震、

世に言う「安政の大地震」(11月27日安政と改元)のとき、被害に遭った吉田町188軒に餅一重ね、赤味噌一重ねを重箱に入れ、重箱のふたへ「羽田文庫」と焼印を押し「御見舞」と書き被災者に配っている。

明治15年(1882)6月、羽田野敬雄はその生涯を閉じたが、羽田文庫は蔵書の閲覧を行っていた。しかし、最大の協力者である佐野権右衛門が明治28年(1895)に没すると経営に行き詰まり、明治40年(1907)頃から書物は売却され始め閉館を余儀なくされた。石巻神社の神主であった大木智治は、それら流出した文庫の蔵本を買い戻し、後年、豊橋市立図書館が開館されるに至って、それらの蔵本を寄贈した。こうした先人の見識と努力により、散逸を免れた貴重な蔵書は、現在、豊橋市中央図書館に約1万冊が受け継がれて大切に保存され、今もその整理が進められている。

また、このほかに、1千冊が西尾の岩瀬文庫に保管されているが、これらは文化的な意味でかけがえのない地域の財産であることは疑う余地はない。

かつて文化の薫りがそこはかとなく漂っていた御文庫の正門(神門)左側下には「松蔭学舎蹟」右側には「誦習舎迹」と書かれた自然石がひっそりとたたずんでいる。



松蔭・誦習の碑

#### 羽田野敬雄(1798~1882)について

羽田野敬雄は、寛政10年(1798)2月14日宝飯郡西方郷(現御津町)の山本兵三郎茂義

の4男として生まれた。文政元年(1818)、21歳の時羽田八幡宮の神主羽田野敬道の養子となり、養父の後をついで羽田八幡宮と湊町神明神社の神主となった。文政8年(1825)国学者、本居大平と同10年(1827)平田篤胤の門に入り国学を学んだ。その後、平田国学の重鎮となり、国学思想普及に努めた。羽田野敬雄50歳の時、羽田八幡宮文庫を設立した。明治元年(1868)京都皇学所の講官に任じられたり、豊橋藩皇学所教授などを勤めた。

著書としては『三河国古蹟考』、『觸穢私考』などがある。

明治15年(1882)6月1日、85歳で没した。墓は長全寺にある。



羽田文庫道標



羽田野敬雄肖像画

#### 幻の「羽田みかん」

「文化十年(一八一三)、羽田みかんを吉田の殿様に献上した」と羽田野敬雄が日記に書いている。また、浄慈院住職の書いた天保十年十月五日の日記に「みかんを売る。金十両也」と書いてある。羽田村ではほとんどの家がみかん畑を持っていたようである。屋敷にみかんの木を植え、実際食べた古老の話によると「大ききや形は現在と同じだが、皮が厚く、種があり、今のみかんのように甘くはなかったよ。」と言う。それでも江戸時代のみかんは貴重な食物であったようだ。昭和二十年の空襲を境に、「羽田みかん」は全滅してしまったようである。

## 2 新しい時代の教育

### (1) 保育園・小学校・中学校の設立

**羽田保育園の誕生** 昭和4年(1929)、時の豊橋市教育会会長の福谷元治と、元小学校長の藤田保吉、伊与田次郎作、山本一郎が豊橋共存協会を設立し、浄慈院の所有地に園舎を建設、翌年1月7日花田共存園が発足した。

昭和9年(1934)4月、豊橋市方面事業助成会に経営主体を移管し、園名を羽田保育園と改称した。その後、昭和20年(1945)に戦災のために一時休園することもあったが、昭和23年(1948)4月には児童福祉法の実施に伴い、愛知県の認可を受けるに至った。

昭和45年(1970)1月1日、設置主体が豊橋市社会福祉協議会から社会福祉法人育英会に変更となり、昭和53年(1978)3月には鉄筋2階建ての園舎に改築され現在に至っている。

**花田小学校(幡太学校)の誕生** 明治6年(1873)7月、愛知県は学区取締に小久保彦十郎を決め、本格的に小学校づくりを進めた。羽田・花ヶ崎村では、3人の世話役が中心になり、小学校をつくる準備をした。

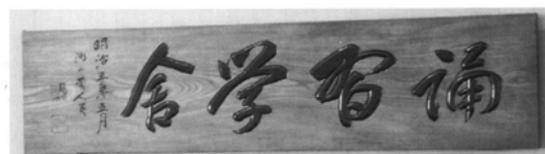
浄慈院の住職が書いた日記『多聞山日別雑記』には、当時、学校をつくるための世話役たちが本堂を教室にするために、ふすまや障子の取り付けや張り替え、幕やのぼり、学用品、本などの準備をしたり、先生を誰にするかを決めたりすることに大忙しだったと書かれている。



教室として使われた浄慈院の本堂

こうして、花田小学校の前身「幡太学校」は、明治6年(1873)10月15日にたくさんの人々に祝福され、渥美郡第十中学区第四番小学幡太学校として開校した。先生は、森平三と安松幹夫、習字担当の山澄覚禅、算術担当の田中金作であった。豊橋の中でも最も早くできた学校の一つであった。

学校は、翌明治7年(1874)正月に長全寺に移転、明治8年(1875)10月2日には、最初の小学校校舎が建てられた。



「誦習学舎」の木額(復刻版)花田小学校体育館

現在、花田小学校の校長室に「誦習学舎」と書かれた木額が飾られている。誦習とは、多くの古文書に見られる言葉で「よみならう」という意味である。羽田文庫をつくった羽田野敬雄(国学者・羽田八幡宮の神官)は、学問の仲間である小野湖山に頼んで「誦習学舎」の木額を書いてもらい、明治9年(1876)に自分の教育の精神を表すこの「誦習学舎」の木額を幡太学校に贈った。

誦習の精神をもって学ぼうという羽田野敬雄の願いは幡太学校の中に生かされ、「建学の志」として受け入れられた。以来、花田小学校では、「誦習学舎」の木額が大切に守られ、その精神が受け継がれている。

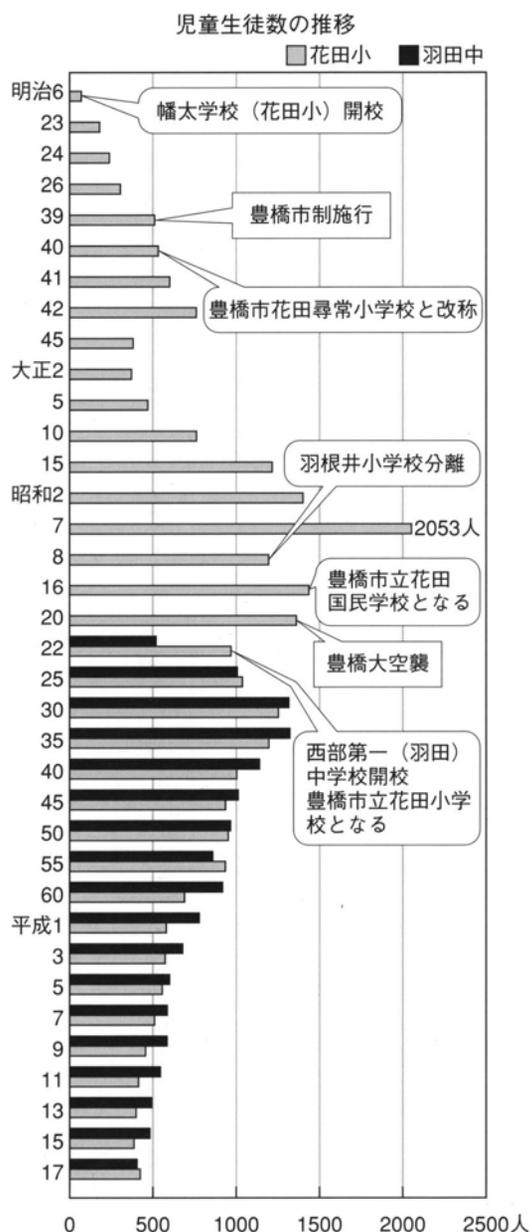
**羽田中学校(西部第一中)の誕生** 戦後の教育は焼け跡の中から始まった。昭和22年(1947)4月、民主主義に基づく新しい教育制度が取り入れられ、新制中学校が誕生することになった。豊橋市も、中部第一(中部中)、中部第二(豊城中)、北部第一(北部中)、北部第二(青陵中)、東部(青陵中)、西部第一、(羽田中)、西部第二(牟呂中)、西部第三(吉田方中)、南部第一(南部中)、南部第二

(南稜中)の10校が創設された。

羽田中学校の前身西部第一中学校は、羽根井国民学校高等科2年の卒業生の希望者が3年生に編入され、高等科1年生が2年生に、花田小と羽根井小の6年生が新制中学1年生に入学して開校した。

当初は校舎もなく、羽根井小学校の校舎を間借りしてのスタートであった。しかも、教室が不足、午前と午後の二部制で授業が行われることになった。

学校は開校したものの校舎もなく、午前・午後の不自由な二部制授業が行われていたので、地域から新校舎の建設をという声があがった。そこで、昭和23年(1948)9月、各町内より新築委員が選出され、校舎新築の第一歩が始まった。さっそく候補地の選考が行われたが、話し合いは困難をきわめた。紆余曲折を経て氏原製糸工場跡地に決定し、新校舎の起工式が行われたのは、翌24年(1949)3月26日だった。



「新校舎へのあこがれ」  
 新校舎！木の香りも新しい新校舎、千人の生徒、いやもつと多くの人々がその完成を待っている。落成式には「パザール」、演奏会、演奏会、演奏会等々夢を描いて楽しんでいく。新校舎の裁縫室、理科室、家事室、音楽室、図書室等どんなに立派に設備されることであろう。こんなことを思い、限らない空想の世界にまで引きずり込まれてしまう。  
 今日もまた窓辺によって新校舎の完成の一日も早からんことを願いながらこんなことを思った。

当時の羽田中新聞より

昭和23年(1948)10月1日、豊橋市立西部第一中学校から豊橋市立羽田中学校と校名が改められた。それに合わせて、校章も変更されることになり、生徒から図案を募集することになった。羽田中



羽田中学校の校章

学校の生徒が、花田小学校と羽根井小学校の出身者であることから、花田小学校の「花」と、羽根井小学校の「羽」を重ねて、それに中学校の「中」を組み合わせた図案(当時2年生の作品)が選ばれた。

## (2) 市民館開館と活動の成果

**市民館の成り立ち** 花田校区市民館は花田小学校敷地内の西側の一角に「コミュニティ活動の拠点」として昭和56年（1981）4月25日開館した。

市民館建設と小学校の体育館建て替えの時期が重なり、校庭が狭くなる事情もあり、1階を市民館、2階を体育館とする、当時としては新たな発想で建設された。市民館がすべて1階ということは、管理のしやすさと、高齢者の利用のしやすさを兼ね備えた、優れた特徴だと言えるだろう。

**校区と市民館のかかわり** 市民館の運営は各町総代及び各種団体長で運営委員会が結成され、定期的に会合が持たれ、日々の実務は主事によって行われている。

**活動状況** 各種団体の利用のほか、多くの自主グループが日々盛んに活動している。

平成16年度（2004）の利用者は27,000人に及び、市内の市民館でも有数の利用率を誇っている。また自主グループも舞踊、カラオケ、ダンス等40団体を数えている。



自主グループの活動風景

**土曜講座** 4年前、平成14年度（2002）学校5日制による土曜日の子どもたちの受け皿として発足した土曜講座も一定の成果をあげ、更に、子どもたちの『居場所づくり』へと発展している。

**活動の成果と今後の課題** 利用人数の増加は、市民館の目的であるコミュニティ活動の拠点としての役割を果たしていることを証明している。しかし、利用者の増加で空部屋がなく、校区民の要望に応じられない問題もある。今後とも利用者の視点に立った柔軟な利用方法を模索していくことが必要であろう。



市民館まつり芸能大会の発表風景

### (3) 出会い・ふれ合い・学びの場

#### — 校区の四大大行事

**校区の概況** 花田校区は豊橋の西の玄関である東海道新幹線側の西駅を起点にして、北西の方角に広がり、校区の中を牟呂用水が流れている。また、港への玄関口でもある。

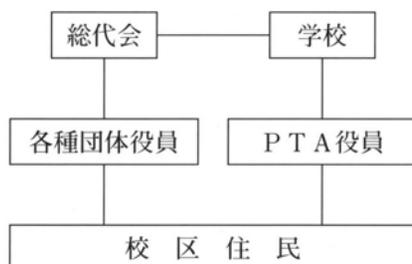
昭和20年（1945）の戦災で町の大部分が焦土と化し、戦後の復興計画にも、やや取り残された面が見受けられる。そのためか、現代的感覚の中に昔ながらの気質が色濃く残る町ともなっている。

校区は次の8町内で構成されている。

花田一番町・花田二番町・羽田町・北側町  
稲場町・百度町・築地町・西羽田町

平成17年（2005）4月1日現在  
世帯数3,253軒・人口8,159人である。

校区の組織図



**校区の活動の基本と四大大行事** 校区の活動の中心姿勢は『三位一体』、すなわち、総代会、学校、校区住民の三者が互いに協力して活動し、より豊かな成果を目指そうとするものである。



納涼盆おどり大会

- ①**納涼盆おどり大会** 毎年8月初旬2日間開催され、1日700人以上の参加者があり、盛大に開催されている。真夏の暑さを忘れさせる「かき氷」のサービスはとりわけ人気がある。
- ②**体育大会** 昭和35年（1960）9月25日第1回の開催より、平成18年度で47回の歴史を刻む伝統行事であり、校区民の体力づくりとコミュニケーション活動の場としても、重要な役割を果たしている。



体育大会風景

- ③**市民館まつり** 毎年11月3日（文化の日）市民館と小学校の体育館を会場にして盛大に開催され、平成17年度（2005）で21回を数えている。

自主グループや校区民有志による芸能発表や作品展のほか、甘酒、コーヒーの無料接待、大抽選会などで1日中大変なにぎわいである。

- ④**防災訓練** 毎年600人以上の参加を得て開催されている。消火器の使用方法などの、現場に即した訓練に重点を置くと共に、特に近年は地震災害への訓練を中心に実施されている。

**今後の活動課題** 校区の世帯数と人口

昭和30年（1955） 世帯数1,626 人口8,872

平成17年（2005） 世帯数3,253 人口8,159

上記の数字から、人口が減少しているにもかかわらず、世帯数は倍増している。核家族化の進行と共に、独居老人世帯と高齢者世帯の増加が顕著である。災害などの非常時に、これらの人たちに、いかに対処するべきか、最重要課題として取り組まなければならない。

### 3 地域に息づく人々の心

#### (1) わが町・花田のところどころ (I)

##### ①羽田一・五の朝市

豊橋市内では現在5ヵ所で朝市が開かれている。羽田一・五の市は、昭和7年(1932)4月より羽田八幡宮の長い参道、境内に毎月1と5の日に開設されている。販売されている物は、主に農産物・青果物・雑貨などである。市内の市の中ではもっとも賑わっているが、近年、出店者も高齢化が進み、店の数も少なくなってきた。



羽田の朝市

##### ②豊橋市消防団第七方面隊花田分団

花田分団は昭和27年(1952)西部消防団花田第一・第二分団として発足した。昭和54年(1979)1校区1分団を原則とする組織改善がなされ第七方面隊花田分団第一部・第二部と呼称が変わった。団員30名は昼夜を問わず校区の安全を守るために努めるとともに、校区防災会と一体となった防災訓練を展開するなどして、住民の負託に応えている。



第七方面隊・火の見櫓名残の半鐘

##### ③豊橋警察署花田交番

明治40年(1907)豊橋市花田町字流川86に花田派出所として開設された。大正4年(1915)3月3日花田町字稲場30に移転、昭和20年(1945)の戦災により焼失、昭和21年(1946)5月2日住民の警察協力者の総意により新築された。それも老朽化のため、昭和47年(1972)取り壊され、昭和48年(1973)4月11日ブロック造2階建て新交番が建設された。花田校区を受持区として住民の安全・安心を守っている。



花田交番

##### ④豊橋花田郵便局

昭和の初期花田地区は製糸業が盛んであった。そこで働く女工さんは、ほとんど北・南設楽郡・長野県から来ており、親元に送金するために郵便局が必要になった。昭和11年(1936)3月26日豊橋稲場郵便局として開局。戦災により焼失するが、戦災復興土地区画整理事業より、昭和24年(1949)10月1日花田町字稲場43の1に移転。平成3年(1991)2月12日改築と同時に豊橋花田郵便局と改称された。

##### ⑤良質な水と醸造業

花田の台地は豊富で良質な湧水に恵まれていたため、酒・醤油などを造る醸造業が発展した。明治40年(1907)に創立された合名会社伊勢屋酒造は、現在も日本酒を年間120kl生産している。また、大正8年(1919)御油より進出したイチビキ株式会社が年間29,000klの醤油を生産し全国に出荷している。

### ⑥公園緑地計画

公園は市街地において厚生・慰安・美観・防災・緑化の役割を担っている。

市民、児童の憩いの場である公園は、また、緊急時には避難場所ともなっている。花田地区には花田公園（0.32ha）・百北公園（0.15ha）・大塚公園（0.33ha）・羽田上公園（0.11ha）・築地公園（0.03ha）の5ヶ所が設けられている。



花田公園

### ⑦街路植樹計画

昭和24年（1949）街路整備が完了した地域より街路樹が植えられるようになった。

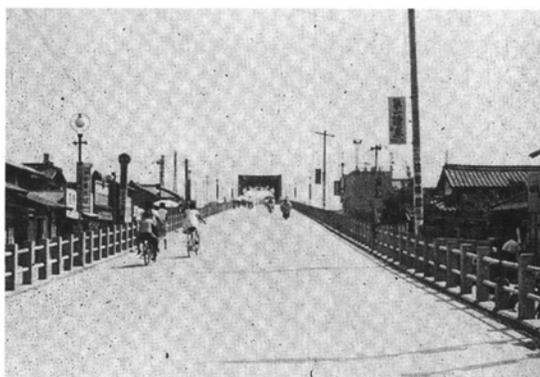
花田校区にも城海津跨線橋（羽田町69）の地点から羽田上神社交差点までの区間に初めてプラタナス67本が植えられた。その後自然災害、木の寿命などにより、残念ながら現在は9本を残すのみとなっている。



街路樹プラタナス

### ⑧城海津跨線橋の立体交差

豊橋市の市街地は鉄道によって東西に2分されていた。戦後、線路西の花田方面が発展するにつれて鉄道を横断する交通量は年々増加し、城海津踏切は市の経済・交通上の大きな障害となってきた。戦災復興事業により、この障害を除き線路西の発展を図るために、県工事により踏切の立体化を願う声が高まった。そして、昭和25年（1950）末、県道豊橋牟呂港橋梁架換工事として立体交差化が実現することになった。工事は県直営であったが、一部鉄道委託・一部請負によって昭和27年（1952）9月竣工された。完成をみた城海津跨線橋は、各種生産物の輸送、踏切遮断にともなう待機時間解消等大きな経済効果を生み出した。しかし、この事業の実施にあたり踏切沿線商店街が経営不能に陥ったり、施工にともなう住居移転など住民の大きな犠牲があったことも忘れてはならない。



昭和27年竣工当時



平成18年現在

### ⑨ 栄泉

「栄泉」は、古来より吉田三銘水の一つであった。他には、松山の正林寺前「呉竹」の泉で、今一つは、別院前の掘井戸であったと記されている。

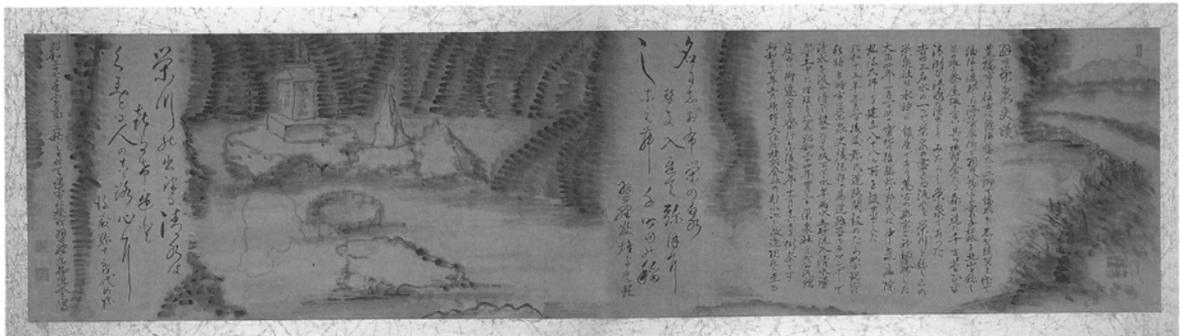
「栄泉」は、北側町にあるイチビキ第3工場西側の信号機がある交差点の真下あたりにあった。

「栄泉」は羽田八幡宮の「みたらし」と称され、苔むす自然の中から湧き出す真清水の一隅には碑石が建てられ、これには「栄泉社」と刻まれていた。例年正月には八幡宮の宮司の手で、しめ縄を飾り、水神としてその清浄を誇りとしてきた。また、氏神八幡宮の祭礼には、御手洗の真清水で斎戒沐浴し、祭事に奉仕するのが習いであった。

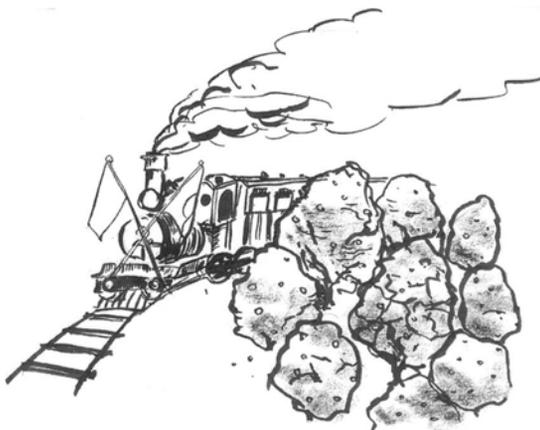
尚、茶道の宗家宗偏流の推奨により、歴代の吉田藩主を始めとして、広く茶詩歌人を歓喜させたものであり、吉田三銘水の名に恥じない真清水は地域の誇りであった

昭和15年（1940）道路開設の際、道路の下になるために栄泉史跡保存のため、コンクリートのトンネルを造った。しかし、道路下であり坂下でもあるため、永年の雨水や土砂等の流入より、湧水口が土中に埋没することが懸念された。そこで、昭和34年（1959）4月3日、町内有志の協力によって、栄川社を北側町公民館庭内に御遷宮、以後毎年12月16日を例祭日とし、昔日の名残を今に伝えている。

また、「栄泉」を偲び、後世に伝えるために、公民館内には羽田野保次氏による栄川社の絵画が額として保管されている。



栄泉の額



みかん畑と汽車

昭和二年に私は花田小学校に入学しました。その頃は、一学年が男子組・二、女子組・二、混合組が一の五クラスで、一クラスの人数は五、六十名だったと思います。授業の様子は楽しかったという思いだけは心に残っています。

校区の畑にはみかんの木が多く、学校から帰ると実っているみかんを取って食べました。

八幡宮は子供の唯一の遊び場で、かくれんぼや、虫取り、野球などして遊びました。近くに大弘法様があり、町の人の厚い信仰を受けていました。その建物の裏には清水が湧いていて、遊び疲れた私たち子供は喉を潤してくれました。その、つめたくて、おいしかったことを、今も懐かしく思い出します。

北側町に住んでいる名城大学名誉教授である田中一成（85歳）さんは子供の頃のことを上のように書いてくださいました。

(2) わが町・花田のところどころ (II)



豊橋駅に入る上り新幹線



校区体育大会・ジェンカを踊ろう



勇壮な手筒煙火



校区のシンボル  
羽田八幡宮文庫旧蹟



花いっぱい運動「花田は花だ」



元気いっぱい 羽田保育園



発表会に向けて大正琴練習

### (3)「庄八塚」の伝承

雨の夜、村はずれの林の奥で、ふわふわとただよう火の玉を、初めて見たのは、水車番のじさまだった。腰を抜かして、ぬかるみをはい回ったという、その格好が目浮かぶようで、この話は、しばらくの間、村の人たちの笑い話のたねにされた。けれど、その後、雨の中、火の玉を見た村の衆が一人、二人と増えるにつれて、村の人たちの顔は、しだいに、こわばっていった。

「あの林の中に、なんかあるぞん」

「なんぞ、村に、たたりでもあるだかのん」

のどかで、平和な、この羽田の里が、なぜ火の玉にのろわれなければならないのか、村の人たちには、とんと思いがたたらなかった。



「やっぱり、成仏できんとみえるのう」

村の衆に尋ねられて、村一番の古老が、ため息とともに、重い口をやっと開いた。それは、遠い昔、この村にあったという恐ろしい話であった。

その頃、この羽田村の庄官は、庄八という男だった。庄八は、強欲で、貧しい人々からも、情け容赦なく、年貢をとりたてた。思いあまった村人の代表が、土下座して願い出ても、いっさい聞く耳は、持たなかった。村では、どうしたものかと、毎晩のように寄り合いが開かれた。

そんな時だった。村の難儀を救うには、庄八を殺すしかない、と思いつめた若者たちが、とうとうある雨の夜、数人がかりで、庄八を

闇討ちにしてしまったのだ。けれども、この事件は、村の秘密としてこれまでずっと闇にほおむられてきた、ということだった。

「庄八のむくろは、確か、あの林の奥に……」

むごいことよのう。ナンマイダブ、ナンマイダブ………古老の話聞いた村の人たちは顔を見合わせながら、口々に、念仏を唱えた。

わたらの羽田村に、そんな血なまぐさい事件があったなんて………、心やさしい村人たちは、悪人とはいえ、無残な最期を遂げた庄八の無念を思った。

相談は、すぐにまとまった。林の中の、それらしい場所には、新たに土が盛られ、立派な塚ができあがった。そして、龍拈寺より招いたお坊さんに、有り難い大般若経をあげてもらい、ねんごろに、庄八の霊を弔った。あわせて、村のためとはいえ、心ならずも人殺しという罪を犯してしまった若者たちの霊にも、手厚い回向を忘れなかった。

「庄八の霊も、庄八をあやめた若い衆らの霊も、どうか成仏しておくれんのん」

村人たちは、手を合わせて、心から、そう念じた。

以来、正月八日には、庄八塚の前で、大般若経をあげて、庄八の霊を供養することが、羽田村の習いとなった。

その後、このあたりで、火の玉をみることは、なくなったということである。

(了)

庄八塚の伝承は、今から200年前の文化3年(1806)に書かれた『三河国吉田名蹤綜録』の中に記されている羽田村の伝承「庄八塚」をもとに書かれたものである。



## 第4章 わが町・花田の将来展望

豊橋市は、将来の都市像として、「笑顔がつなぐ緑と人のまち豊橋」をあげ、豊かな自然に囲まれ、市民が主役として、いきいきと活動する、元気な「まちづくり」をめざしている。こんな市のビジョンと重ねる形で、5つの視点から、わが町・花田の将来の「まちづくり」を展望してみたい。

### (1) 健康で、笑顔あふれるまち

高齢化が進む将来、人々の健康は、地域における大きな問題となってくるに違いない。

花田では、平成17年度より、校区をあげて糖尿病の予防対策に取り組んでいる。

健康は、もちろん、個人に関わる問題である。けれども、健康問題への自覚を促し、励まし合って、それぞれの健康管理や増進のための実践運動を進めるには、子どもから大人まで、地域をあげた取り組みが大きな力を発揮する。ひとりではできないことも、みんなの後押しで可能になってくるからである。

乳幼児、子ども、そして、高齢者と、それぞれが抱える健康づくりへの課題は、たくさんある。悩みを持つ親や、何とかしなければと願う家庭も少なくないだろう。

健康課題への取り組みは、糖尿病対策に限ったことではない。その時々健康づくりに関する課題に、校区をあげて取り組む活動を発展的に、継続していくことは、これからの「まちづくり」の大きな柱になることだろう。

まず、健康！みんなの明るい笑顔があふれる花田をめざしたいものである。

### (2) 緑を守り、環境を大切にすまち

計画的に植えられた街路樹の並木。牟呂用

水を彩る、両岸の柳。そして、うっそうと繁る社寺の森や公園の花壇は、花田ならではの景観で、心の安らぐ空間をつくっている。先人の努力が今に伝える、この緑を、次の世代に引き継ぐことは、地域に生きる私たちの務めである。

そうした活動の一つとして、校区をあげて取り組む「花いっぱい運動」がある。また、小中学校の子どもたちによる「牟呂用水美化活動」も、環境への心を育てる実践として定着している。公園の花壇の世話に、汗を流す人達もたくさんいる。

各町内で取り組む「530運動」を含め、こうした、様々な実践活動を通して、緑を大切にす心を、次の世代へと伝えていく努力を継続していくことは、緑と人のまち、これからの花田の「まちづくり」を進める決め手になることだろう。

こうした姿勢で、「まちづくり」が進められるならば、「ごみの分別処理」を始め、身の回りにある様々な環境問題にも、適切に対処できる、力強い地域のコミュニティが実現していくに違いない。

### (3) 交通に便利で住みよいまち

交通の要衝、豊橋駅を擁する花田は、三河港への玄関口ともなる位置を占め、そうした地の利を活かした再開発や道路整備が、これからの「まちづくり」の大きな課題になることだろう。

その折りには、まず、地域住民の安全や利便性を考えるという視点で、計画の推移には校区をあげて、積極的に関わっていききたいも

のである。

交通の便は比較的よいとはいえ、例えば、鉄道線路をはさんだ東西の往来問題を始め課題は、すべて解決されているわけではない。

道路の拡張だけでなく、立体交差化や地下化を含めた抜本的な道路整備、交通機関の路線の再検討や増発、さらには、新交通システムの導入なども含め大胆に発想することが必要だろう。みんなで、人が集い、人々が元気に行き交う、これからの「まちづくり」に、大きな夢を広げたいものである。

#### (4) 災害に強いまち

不時の災害に備えることは、将来にわたる「まちづくり」の極めて重要な課題である。防災のための施設・設備の整備を始め、自主防災の組織づくりや、地域住民による避難訓練などは、市・町によって、着々と進められている。

ところで、災害に強いまちを考える時、あの阪神淡路大震災の被災者達の証言は、改めて、日頃からの地域コミュニティづくりの大切さを思い知らされるものであった。あの混乱の中で、始めに、最も頼りになったのは、ご近所同士の助け合いだったというのである。救急の組織や、行政による救援の手が届きかねる「時」と「場」で、地域のコミュニティが、その底力を発揮したわけである。

人々が、地域住民としての絆を深めるための日常的な努力を怠らないまち——実は、それが、不時の災害に、最も頼りになる、心強いまちだったのだ。

校区市民館の活動や校区の行事は、地域のコミュニティを築くための、いわば、きっかけである。大切なことは、人や地域に積極的に関わろうとする、一人ひとりの姿勢だということ肝に銘じつつ、その思いを、災害に強いまち、即ち、人と人々が心をつなぐ「まちづくり」に結集することなのである。

#### (5) 子ども達が育つ、安心・安全なまち

校区では、子ども達を犯罪や事故から守るために、例えば、「子ども110番の家」、「校区見まわり隊」、「夜間パトロール」などの活動を進めている。こうした、目に見える活動は実際に犯罪を阻止するだけではない。同時に、地域の人々に、子どもたちの実態や健全育成に関わる問題に関心を深めてもらえるという意義も極めて大きい。子ども達への関心が深まり、危機感を持つことで、子どもたちが育つ安心・安全な「まちづくり」への課題を、地域の大人達が共有できるからである。

子ども達が安全に生活し、健全に育つまちは、誰もが、安心して暮らすことができるまちでもある。

地域の将来を担う子どもたちが、よりよく育つ環境をどのように整えていくか、ここにもこれからの花田の「まちづくり」を考える大きな鍵がありそうである。

豊橋100年の歴史の中で、ふるさと花田も、幾多の変遷をたどって、今日に至った。が、その時の流れの節々には、様々な困難を克服してきた、先人の強い意思と郷土への熱い思いがあったことを忘れてはなるまい。

これからの「まちづくり」においても、問われているのは、住民一人ひとりの意思と努力である。そのことをお互いがしっかりと胸に刻みつつ、わが町、花田の将来への夢を、それぞれに、ふくらませたいものである。



花田小授業風景

## 花田校区の年表

時代	西暦	和暦	○日本・豊橋周辺の出来事	花田校区とその周辺の出来事
先土器	BC10万		・牛川原人 ○岩宿遺跡（群馬県） ○高山蛇穴遺跡	
縄文	BC8000 BC5000			・石塚貝塚
弥生 古墳	BC 200 400 500		・瓜郷遺跡 ・三ッ山古墳 ・長火塚古墳	・牟呂王塚古墳
古代	645 672	大化元	○大化の改新	・羽田八幡宮創建
平安	794 835 938	延暦13 承和2 天慶元	○平安遷都 ・志香須香の渡し	・『和名類聚抄』に「幡太」の地名が記載される
鎌倉 室町	1333 1364 1435	元弘3 正平19 永享7	○鎌倉幕府滅亡	・『神鳳抄』に「秦の御蘭」の地名が記載される ・三河の国杉山北宮に懸仏が寄進される（懸仏は浄慈院蔵）（2月9日） ・羽田村古城（百度屋敷）築城 ・金光寺創建 ・長全寺創建 ・今川氏真、羽田八幡宮へ社領13貫700文他寄進
	1466~88 1539 1560 1561	文明年間 天文8 永禄3 永禄4	○織田信長齊藤義興を美濃に攻める	・石原百度兵衛、姉川の合戦に参戦（6月28日）
安土・織田	1570	元亀元	○姉川の合戦（6月28日） ・豊川に土橋かかる	・百度屋敷、鋤柄百度右衛門、長篠の合戦に参戦（5月21日）
	1575	天正3	・長篠の合戦（5月21日）	
江戸	1603 1615	慶長8 元和元	○江戸幕府開府 ○大坂夏の陣（4月6日）	・羽田村郷士、都築伝四郎大坂夏の陣に参戦（羽田名躰綜禄）（5月） ・都築伝四郎、島原の乱に参戦 ・浄慈院下野国より馬見塚村へ移転し創建（その後、高須新田へ移転） ・浄慈院、高波のため高須新田より、羽田村の現在地へ移転（4月8日）
	1637 1667	寛永14 寛文7	○島原の乱（11月9日）	・浄慈院本堂建立（現在も使用）（5月） ・浄慈院地藏堂建立（現在も使用）（9月） ・羽田上神社焼失
	1680	延宝8	○徳川綱吉が5代将軍となる（7月18日）	・羽田みかんを吉田藩主（松平信明）に献上（8月27日） ・浄慈院護摩堂建立（9月1日） ・おかげ参り隆盛・羽田村へ御札降る（7月25～8月20日）
	1707	宝永4	・宝永の大地震（吉田全戸被害、倒壊323戸。吉田城本丸御殿倒壊11月4日）	・雨乞い（7月7日）・この月痲瘡流行し子ども多くかかる
	1710 1727 1778 1788	宝永7 享保12 寛政10 天明8	・吉田藩主松平信明老中となる（4月4日）	・長全寺本堂再建（2月27日）（多聞山日別雑記）
	1813 1817 1830	文化10 文化14 文政13	・おかげ参り流行、豊川から船で伊勢へ（7月） ・吉田藩主松平信順、大坂城代となる	・この年、2月7日の初午 浄慈院の寺子屋の寺子46名 ・公儀より「大塩平八郎他4名の絵姿」回るとの噂あり（多聞山日別雑記）（3月3日）
	1831	天保2	・天保の大飢饉（1833～36）	・晩八ッ頃（2時）より暴風雨 牟呂、花ヶ崎高潮に遭う（8月5日） ・羽田みかんを売る。金10両（多聞山日別雑記）（10月5日）
	1832 1833 1835 1837	天保3 天保4 天保6 天保8	○大塩平八郎の乱（2月19日） ・吉田藩主松平信順老中となる（3月16日）	・藩主訃報の御触（普請7日、鳴り物50日停止…）（萬歳書留控） ・羽田文庫創設（9月2日） ・將軍訃報の御触（漁獵、その他の殺生、鳴り物停止…）（7月26日）
	1838	天保9		・羽田八幡宮神主羽田野敬雄、ご朱印改めのために江戸へ行
	1839 1841 1844	天保10 天保12 天保15	○天保の改革（5月15日） ・吉田藩主松平信宝逝去（3月10日）	
	1848 1853	嘉永元 嘉永6	○ペリー来航 ○12代将軍家慶逝去（6月22日）	
	1854	嘉永7		

時代	西暦	和暦	○日本・豊橋周辺の出来事	花田校区とその周辺の出来事
	1854	安政元	○日米和親条約 ・安政の大地震(吉田城隅櫓、二ノ丸大書院他大破損)	く(9月29日) ・安政の大地震 羽田村120軒潰れたる家1軒もなし(萬歳書留控)(11月4日) ・大地震被災の困窮者に対し羽田文庫から餅と味噌を見舞いに出す(12月22日~24日) ・長全寺弁天堂をつくる(6月24日) ・夏、流行病のため村人33人死去(9月16日)
	1855 1856	安政2 安政3		・藩主(松平信古)羽田文庫見学(4月4日) ・羽田文庫の閲覧所「松蔭学舎」建立(7月) ・初午この年浄慈院寺子屋筆子53名(2月12日)
	1857 1858	安政4 安政5	○日米修好通商条約結ぶ  ・コレラ流行により御城内にて祈祷(8月20日)	・この年 羽田村の家数135戸、人口634人 ・西羽田天王社拝殿改造(2月26日) ・コレラ流行につき祈祷(羽田八幡宮)(8月18日)
	1859 1860	安政6 安政7		・西羽田庚申と秋葉大神之祠建立(12月25日) ・羽田村代々庄屋本多半右衛門領分取締役庄屋に任命される(3月)
	1864	万延元		・冬、羽田文庫から『ききんのこころえ』出版される ・羽田村中郷氏子19名によって羽田八幡宮へ石灯笼2基寄進(7月2日)
	1866	慶應2	○孝明天皇崩御(12月25日)	・主上崩御(孝明天皇)につき鳴物停止、明日年頭のため、登城におよばずとの廻状、慶應3年1月6日に来る(多聞山日別雑記)
	1867	慶應3	・牟呂村に「ええじゃないか」の騒動起こる  ○大政奉還 江戸幕府滅亡(10月14日)	・羽田文庫の蔵書1万巻となる(2月) ・西羽田次郎兵衛のミカン屋敷にお札ふる(7月23日) 7月から8月末までに羽田村にお札たくさんふる(ええじゃないか騒動)(多聞山日別雑記・萬歳書留控) ・藩主(松平信古)羽田文庫にて孝子を表彰(7月)
	1868	慶應4		・藩主(松平信古)羽田文庫にて孝子を表彰(7月)
明治	1868	明治元	○戊辰戦争、明治維新 ・悟真寺に三河裁判所を設置(4月25日)	・羽田野敬雄、京都皇学所教授として京都へ出立(11月28日)
	1869	明治2	・吉田藩を豊橋藩と改称(6月19日)	・北側田中伝次郎庄屋となる(12月15日) ・暴風雨により瓦、境内の松、ミカンの木多く傷む(7月13日)
	1870	明治3	○平民に苗字をつける(9月19日)	・羽田村の困窮者に村で13両集め、粃米を与える(4月8日) ・羽田野敬雄、時習館皇学(豊橋藩皇学所)開校につき、出仕、教授として毎月講義する(8月8日)
	1872	明治5	○全国戸籍調査(1月29日)(壬申戸籍) 日本の人口3,311万825人 ○12月3日を明治6年1月1日とする(太陽暦採用)	
	1873	明治6	○地租改正(7月) ・吉田城取壊す	・第10中学区第4番小学幡太学校として、浄慈院に開校(教師3名、生徒70余名)(10月15日) ・幡太学校を長全寺に移転(1月8日) ・幡太学校長全寺に校舎新築(渥美郡中最初の校舎)(10月2日)
	1874 1875 1876	明治7 明治8 明治9	・朝倉仁右衛門座繰製糸を始める  ・中村道太、第八国立銀行を本町に設立開業(3月20日)	・羽田野敬雄 幡太学校に小野湖山の書いた「誦習学舎」の木額を贈る。(教師4名・生徒112名)(5月) ・幡太学校生徒の紀元節等に関する記事が、4月19日東京開知新聞、2月8日愛知新聞に紹介される
	1878 1879	明治11 明治12	・渥美郡役所を大手通に設置 ・小淵志ち二川にて玉糸製糸を創業	・羽田村と花ヶ崎村を合併、花田村となる(12月28日) ・コレラ流行 下地、船町辺コロコロ死ぬる者多し(多聞山日別雑記)(7月9日) ・羽田野敬雄没す(85歳)(6月1日)
	1882 1888	明治15 明治21	○東海道線豊橋駅開始(9月1日)	
	1889	明治22	○大日本帝国憲法発布(2月11日) ・牟呂用水全通 ・豊橋町制施行(10月1日)	・花田村西宿前に花田1村をもって校舎新築(800円)(9月)
	1891	明治25		・花田村立花田尋常小学校と改称(5月)
	1899	明治32	・豊橋日刊紙(参陽新報)発刊(2月11日)	・豊橋米麦取引所花田村石塚に設立(1月) ・私立安藤動物園花田村西宿(豊橋駅前)に開設(3月9日)

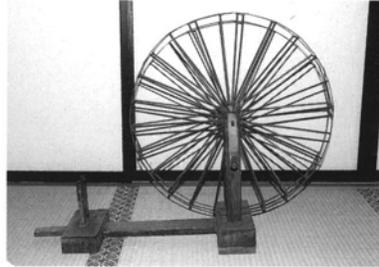
時代	西暦	和暦	○日本・豊橋周辺の出来事	花田校区とその周辺の出来事
	1901 1902 1904	明治34 明治35 明治37	○煙草専売法施行(4月1日)	・牟呂用水の水を花田村、吉田方村、牟呂村に引く(三村用水) ・花田村立花田尋常小学校、校門を新築(1月26日) ・煙草製造所、花田村西宿に設置(7月1日) ・花田尋常小学校赤痢発生(7月9日) ・渥美郡豊橋町、花田村、豊岡村を合併(7月16日)
	1906	明治39	・豊橋市誕生(全国で62番目の市 人口 37,635人) (8月1日)	・豊橋市花田尋常小学校校歌を制定(9月26日)
	1908	明治41	・第15師団を高師村に誘致 (11月16日)	・学区再編成で分離する児童を新川、松葉、狭間学校に引き渡す
	1909	明治42	○小学校教育が6年になる ・豊橋市狭間尋常小学校、花田町狭間に開校(10月10日)	・豊橋市花田尋常小学校を花田町字大塚の現在地に移転し、 新築する(7月17日)
大正	1916	大正5	・米人スミス氏豊橋練兵場で 曲芸飛行を行う(5月5日)	・大正天皇即位 大礼記念植樹(3月31日) 花田小の生徒羽田八幡宮、浄慈院、長全寺に楠、公孫樹を 植える
	1918	大正7	・松葉町・狭間町で米騒動お こる(8月12日) ・この年10月から翌年につ けてスペインかぜ大流行	・花田小、流行性感冒のため12日間臨時休校(11月1日)
	1920	大正9	・市制15周年記念(9月20日) ・第1回国勢調査 人口 65,163人(10月1日)	
	1921 1925	大正10 大正14	・第2回国勢調査 人口 82,371人(10月1日) ・市内電車開通(12月) ○ラジオ放送開始	・大山塚人道跨線橋設置 ・花田小学校教育後援会設立(生徒数2,080人) ・豊橋教育会より「羽田野佐可喜翁小伝」出版される(10月 17日)
	1926	大正15	・市制施行20周年祝賀式開催 (10月1日)	・榮泉のほとりに大弘法様建立(4月29日) ・豊橋商業会議所、花田町字石塚に移転(10月2日)
昭和	1927 1930	昭和2 昭和5	○金融恐慌始まる ・全国産業博覧会開催(5月) ・第3回国勢調査 人口 98,555人(10月1日)	・花田小学校2階建校舎を新築(4月) ・羽田保育園の前身、花田共存園開園(1月7日) ・西駅できる
	1931	昭和6	○満州事変 ・市制施行25周年記念(11月1日) ・豊橋公会堂竣工(総工費17 万円)	・花田小学校時報にサイレン使用 ・羽田上神社本殿建立(4月8日)
	1932	昭和7	○5・15事件 ・豊橋市立豊橋病院開院(6月) ・牟呂吉田・下地・下川・高 師・多米各町を豊橋市に 合併(9月) ・人口 142,579人	・花田小学校鉄筋コンクリートの講堂竣工(2月5日) ・羽田1・5の朝市はじまる(4月) ・映画館「花田館」花田町字稲場に創立(12月22日) ・この年、花田小学校の生徒数2,053人
	1933	昭和8	・豊橋市羽根井小学校開校 (4月1日)	・羽田町公民館設立(4月1日) 花田小学校から分離した羽根井小学校児童との決別式挙 行(7月1日) ・花田町字中央分離し、南中央独立(9月)
	1935	昭和10	○青年学校令公布(4月1日)	・花田小学校生徒文集「誦習」第1号発行(2月11日) ・八町通架道橋(絹田ガード)完成(8月12日) ・豊橋稲場郵便局開局(3月26日)
	1936 1937 1937	昭和11 昭和12 昭和12	・市制施行30周年祝賀式開催	・道路開設のため「大弘法様」花田町字百北に移転 ・北側町公民館設立(11月3日)
	1940	昭和15	○国民服令公布(11月1日) ・紀元2600年記念式典及び旗 行列(11月10日)	・花田小学校6年生紀元2600年記念行事として伊勢、奈良、 京都方面へ3泊4日の修学旅行実施(5月31日)
	1945	昭和20	・三河地震(1月13日) ・豊橋空襲(6月19日) 焼夷弾 17,015戸被災 死者624人 ○終戦(8月15日)	・花田小校区民罹災のため休校し校舎を罹災者に開放(6月 20日)
	1946	昭和21	・人口 105,840人 ・愛知大学開校(11月15日)	・花田派出所花田町字稲場30に新築(5月2日)

時代	西暦	和暦	○日本・豊橋周辺の出来事	花田校区とその周辺の出来事
	1947	昭和22	・戦災復興計画樹立	・豊橋市立西部第1中学校開校（4月1日）
	1948	昭和23	・豊橋球場オープン	・豊橋市立羽田中学校と改称開校（10月1日）
	1950	昭和25	○朝鮮戦争（6月） ・第7回国勢調査 人口 145,855人	・豊橋民衆駅新築（3月）
	1952	昭和27	・豊橋市養老院開設（3月） ・水道局発足（10月）	・消防花田分団西部消防団花田第一・第二分団として発足 ・花田小学校創立80周年記念 新校舎8教室竣工
	1953	昭和28	・台風13号、豊橋に被害をもたらす（9月）	・城海津跨線橋落成（5月）
	1955	昭和30	・二川、石巻、高豊、老津、前芝、賀茂、杉山、の各町村豊橋市へ合併（3月4日） ・第8回国勢調査 人口 202,985人	・花田小学校給食室を移転する（8月）
	1957	昭和32	・昭和32年度市予算総額 20億6439万円	・羽田上公園、築地公園開園（3月1日） ・羽田八幡宮祭礼余興煙火事故（9月24日） 死者2名・重傷者6名
	1959	昭和34	○メートル法実施（11月） ・花田、羽根井、下地の3地区新町名、新番地となる（7月31日） ○伊勢湾台風（9月26日）被害総額27億円余 県下被災児童21万人 ・吉田大橋完成（10月）	・栄川の祠、北側町公民館前にご遷宮（4月3日） ・町名、地番変更により花田小学校は西羽田町247番地となる（8月）
	1961	昭和36		・築地町公民館設立（3月）
	1964	昭和39	○東京オリンピック開催（10月10日）	・羽田八幡宮本殿改築・御遷宮奉祝祭（10月1日） ・牟呂用水の川底コンクリートになる（昭和40～42年） ・羽田中学校体育館竣工
	1965	昭和40		・稲場町公民館完成（9月）
	1968	昭和43	・明治100年記念 ・郵便番号制実施 ・市民文化会館完成（10月）	・花田小学校明治100年記念式典開催（10月） ・花田小学校全教室にTV設置
	1971	昭和46	・「動く市役所」を開設（7月）	・羽田八幡宮結婚式場造営（11月1日）
	1972	昭和47	○札幌冬期オリンピック開催	・花田小学校「学制発布100年記念植樹」実施（8月10日） ・「百年花田学校誌」発行（10月14日）
	1973	昭和48	・武道館開館（4月29日） ・市の木「くすの木」に決まる（4月）	・豊橋警察署花田交番2階建となる（4月11日）
	1974	昭和49	・豊橋丸栄開店（10月1日）	・羽田八幡宮社務所焼失（11月4日）
	1975	昭和50		・羽田八幡宮社務所造営（8月20日）
	1979	昭和54	・豊橋美術博物館開館（6月1日）	・消防組織改善で「第七方面隊花田分団第一部・第二部」と呼称が変わる ・長全寺本堂改築建立（4月1日）
	1980	昭和55	・豊橋市資源化センター開設 ・人口 304,273人	
	1981	昭和56	・港湾合同庁舎完成（3月）	・豊橋市花田校区市民館開館（4月25日）
	1982	昭和57		・羽田中学校オーケストラ部CBC子ども音楽コンクールで全国優勝（1月）
	1983	昭和58	・豊橋市中央図書館開館（2月） ・豊橋短期大学開学（9月）	・花田小学校創立110年記念誌『花田の人と風土』発行（11月6日）
	1988	昭和63	・牟呂用水通水100周年記念式典開催（3月8日）	・西羽田町公民館新築（12月）
平成	1991	平成3	・豊橋市二川宿本陣資料館開館（8月1日）	・豊橋稲場郵便局改築し豊橋花田郵便局と改称（2月12日）
	1992	平成4	・豊橋市総合動植物園開園	・花田小学校「創立120年記念式典」開催（11月11日）
	1996	平成8	・市制施行90周年記念式典開催（10月17日）	・羽田中学校「創立50周年記念式典」開催（11月17日）
	1998	平成10	○長野冬期オリンピック開催	・豊橋市中央図書館「羽田八幡宮文庫開設150年記念展」開催（9月15日）
	2004	平成16	・新総合福祉センター「あいトピア」竣工（1月27日）	・花田小学校創立130年記念誌『花田の人と風土』復刻（3月19日）
	2006	平成18	・豊橋市制100周年記念式典開催（8月1日）	・花田小学校2学期制始まる（4月1日）

## 校区史関連の写真



渥美郡花田村々誌



糸車



大弘法



とよはしの巨木・名木100選  
浄慈院のサルスベリ



昭和38年 新幹線豊橋駅 建設工事  
豊橋市高洲町白井良和先生提供



花田小学校 正門



花田校区見まわり隊



花田校区 花いっぱいのもちづくりの会 表彰



花田校区 生活安全セーフティマップ

## 編集後記

豊橋市制施行から百年、時代とともに花田校区の街の姿も大きく移り変わってきました。

私が子供の頃（昭和20年代）には、羽田八幡様の北方を眺めると静かな田園風景が広がり、池や小川は夏になると水草におおわれました。夕方には無数のホテルが乱舞し、用水や池ではフナやメダカがたくさん捕れました。今、振り返ると懐かしい思い出です。

昭和20年（1945）6月の空襲で校区も多大な被害を被りましたが、翌21年から始まった戦災復興によって道路も整備され、路肩には街路樹が植えられ、また校区の随所に公園が造られるなど、今までにない美しい姿に変わってきました。

かつて羽田村より始まった花田校区の地は、縄文時代前期の石塚貝塚にみられるように古くから人が住み、各時代、時代を通してさまざまな営みが繰り返されてきました。

私たち編集委員会は、できるだけ古い史料を集め、校区を足で回り、古老にその頃の話の聴き、その当時の校区の歴史を再現するように試みました。ただ、紙面に限りがあることや編集委員の力不足のため、それが十分達成されたかどうかは甚だ疑問です。

本書が次の時代を背負うべき若い人に校区の成り立ちを通して「郷土に対する愛着心」を育む一助になれば幸いであり、本書刊行の主たる目的もここにあります。

最後に調査や聞き取りに対して終始懇切丁寧にご協力いただいた羽田八幡宮様を始め、多くの皆様方にお礼申し上げます。

編集委員 山澄和彦  
平成18年6月吉日 編集委員一同

### 花田校区史編集委員

#### ■編集委員長

佐藤 庄一

#### ■副委員長

藤田 正司 近藤 達二

#### ■編集委員

高木 由幸 羽田野敏治 地宗 一郎  
松井 隆幸 山澄 和彦 山田 美文  
横田小百合 荻野 文夫 大須賀俊裕  
神藤 輝夫 柴田 圭吾

## 参考文献

『吉田方郷羽田村綜録』（文政2年羽田野敬雄写本）・『多聞山日別雑記』（原本）・『幕末三河国神主記録』（平成6年羽田野敬雄研究会）・『渥美郡花田村々誌』（写本）・『幡太学校諸祭祀祝文』（写本）・『国史上より観たる豊橋地方』（昭和12年大口喜六）・『羽田村古城百度屋敷考』（平成元年山本薫）・『参河国名所図絵』（昭和47年愛知県郷土資料刊行会）・『東三河郷土散策』（昭和48年鈴木源一郎）・『明治初期に於ける豊橋地方の初等教育』（昭和15年近藤恒次）・『豊橋寺院誌』（昭和34年豊橋仏教会）・『豊橋戦災復興誌』（昭和33年豊橋市）・『豊橋の町名の変遷』（昭和51年吉川利明）・『地方知識人の形成』（1990年田崎哲郎）・『わが町羽根井』（昭和62年豊橋市立羽根井小学校）・『愛知県教育史』（昭和48年愛知県教育委員会）・『豊橋市の史跡と文化財』（昭和56年豊橋市教育委員会）・『三河国吉田名蹟綜録』（平成9年豊橋市翻刻）・『とよはしの歴史』（平成8年豊橋市）・『地方都市の研究』（昭和29年古今書院）・『豊橋市史1・2・3・8巻』（豊橋市史編集委員会）・『豊橋市政50年史』（昭和51年豊橋市）・『花田の人と風土』（2004年豊橋市立花田小学校）・『羽田中五十年』（平成8年豊橋市立羽田中学校）



花田校区史編集委員

### 校区のあゆみ 花田

平成18年12月25日発行

編集 花田校区総代会  
花田校区史編集委員会  
発行 豊橋市総代会  
印刷 共和印刷株式会社

R2100  
高品質な印刷に100%の再生紙を使用しています。

PRINTED WITH  
SOY INK





2006年  
市制100周年  
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋